

「三つ子の魂百まで」をめぐって

——深く考え、豊かに感じるために——

文・山下太郎

『星の王子様』(サン=テグジュペリ)を持ち出すまでもなく、常識や先入観にとらわれると、幼いころには当たり前を持っていた好奇心を失う恐れがあります。空はなぜ青いのか？ 雲はなぜ落ちてこないのか？ 風はどうして吹くのか？ 誰もが一度は考えたことのある疑問だと思います。でも、これに対し、常識が耳打ちします。「そんなことを考えてどうするのか？」と。アインシュタインは「聖なる好奇心を失うな」(never lose a holy curiosity)と喝破しましたが、好奇心は常識の前ではあまりに非力です。

ここで、学校教育に目を移すと、試験で出題される内容はすべて正解のある「常識」ばかりです。試験の結果を見れば、どれだけ「常識」を知っているかの参考になるかもしれませんが、一人一人がどれだけ「好奇心」を輝かせているのかは誰にもわかりません。しかし、実際に大学や社会で求められるのは、そんな「常識」のパロメータでしょうか、それとも「好奇心」(とそれに付随する向上心)の輝きでしょうか。私は後者だと考えます。もちろん、人によって答えは様々でしょう。しかし、「好奇心」を否定する意見は少数派だと思います。また、そうあってほしいものです。であれば、なぜ大人は(最近子どもも?)繰り返し口にするのでしょうか、「そんなことを考えてどうするのか？」と。

司馬遼太郎氏は、中学校時代、英語が嫌いでした。授業中に「ニューヨークとはどういう意味ですか？」と先生に尋ねたら、「そんなばかな質問をするな」と叱られたからだとか。むろん司馬氏は、「New York = ニューヨーク」といった単なる言葉の言い換えではなく、ニューヨークを「新しいヨーク」と訳して初めて気づく言葉の歴史に興味を持ち、上の質問をしたわけです。図書館に足を運び、この地名の由来を調べていくうちに司馬氏は確信します。「知識は教師に与えられるものではなく、自分で調べて獲得するものだ」と。

言うまでもなく、この確信を支える根っこには、司馬氏の強い「好奇心」があったわけです。あふれる好奇心は強力な磁石のように知識を束ね、創造に結びつけるでしょう。逆に、「好奇心」を欠いたままその場しのぎの「知識」をいくら詰め込んでも、それだけでは創造は生まれません。

ではこの大切な好奇心をどうやって育てればよいのでしょうか。私は好奇心は育てるものではなく、守るものだと思います。子ども時代に好奇心に輝いていない子は一人もいません。その好奇心が輝きを失わないために、周囲の大人がこれを尊重するのか、常識をふりかざすのか。子どもが何かを問うたとき、すぐに答えを教えることがよいとは限りません。そんなときには、「よし、いっしょに考えてみよう」とじっくりそばに寄り添うことが大切です。そうすれば、子どもたちは時間をかけてものを考えるようになるでしょう。

最後に、表題の「三つ子の魂百まで」について一言。この表現は、辞書的には「三つ子の魂<は>百まで」と読むべきですが、私は本文の趣旨に即し、「三つ子の魂<を>百まで」と読み替えたいと思います。そして「三つ子の魂」とは人間の尊い「好奇心」そのものである、と。願わくは、世の子どもたちが、いつまでもあふれる好奇心を輝かせ、深く考えることと豊かに感じることの喜びを生涯の友としますように。

(山の学校代表/山下太郎)

◎冬学期の時間割◎

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん(隔週)(p3)	ことば4年A(p10)	ことば作文5・6年(p14) ラテン語初級講読A(p29)	中1~3・数の基本A ラテン語入門(p28)
水	ことば1年(p7) ことば2年(p9)	かず1年(p15) かず2年(p17) かず3・4年A(p18)	中1~3・日本語の読み書き (p23) 古文講読(p27)	
木	ことば3年(p9) かず5~6年(p20) プレ英語(全6回)(p22)	ことば5・6年(p12) かず4年B(p19)	中1・英語の基本(p24) 中2~3・英語の基本 (p25) 高1~3・英語の基本	中1~3・数の基本B(p26) ギリシア語入門(p31) ウェブプログラミング入門
金	かず3~6年(p21)	ことば2~4年B(p11)		ラテン語初級講読B(p29) ラテン語中級講読(p31)



●四月からの時間割(予定)●

	4:20-5:20	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
月			かず6年A	
火	しぜんA・B(隔週) かいがA(隔週)	ことば1年A ことば5年A かず3年A	ことば6年(作文指導) 中学・英語の基本 ギリシア語入門	ラテン語初級講読A ギリシア語講読
水	かず1年A ことば2年	かず2年 かず3年B	中学・英語の基本 古文講読	ラテン語初級文法
木	しぜんC・D(隔週) かいがB(隔週) ことば4年	ことば3年 かず5年A	中学・英語の基本 高校・英語の基本 英語指導(一般)	高校・数の基本 ウェブプログラミング入門 ラテン語初級講読C
金	ことば1年B ことば3~5年B	かず1年B かず3・4年B かず5・6年B		ラテン語初級講読B ラテン語中級講読

- * 新しく「かいが」(小1~6年)、「ギリシア語講読」(一般)がスタートしました。
- * 「しぜん」が4クラス(A~D)に増えました。なお、AとB、CとDのクラス分けはこちらで行い、後日お知らせいたします。
- * 「しぜん」と「かいが」は隔週で交互に行いますので、両クラスを同時に受講することは可能です。
- * 1コマ目の時間帯が、10分遅くなりましたのでご注意ください(4:20-5:20)。
- * 「しぜん」と「かいが」は3:50-5:20です。
- * 上の時間割にないクラスの開講につきましては、お気軽にお問い合わせください。ご希望の曜日、時間帯を検討いたします。(例:「日本語の読み書き(中学1~3年)」「数の基本(中学1~3年)」「漢文講読(一般)」)
- * 「中学・英語の基本」につきましては、3クラス(予定)のうち受講可能なクラスをお聞かせ下さい。

『かいが』（小学1～6年）

—驚き、喜び。描くことで見つけよう。—

最初に、新しく開講する『かいが』クラスを担当させて頂くことのできる幸運、ご縁に、心から感謝申し上げたいと思います。

かいがクラスでは、「発見」を一つの大切なキーワードとし、山の学校の自然豊かな環境を最大限に生かしたいと考えています。目を凝らせば、身近で何気ない自然の中にも、壮大な世界、多くの謎に満ちた世界を発見することができるでしょう。限りない色や形が、絵画への衝動を与えてくれます。

また、各自の作品を発表し、讃え合う時間を大事にします。友達作品の中に、自分とは異なる考えや視点、心の動きを発見することは、自分自身を知る事にも繋がります。

絵画の価値は、表された結果よりもむしろ、描くという行為そのもの、物事や人の心にじっと目を向け、想いを巡らせる時間の中にあります。それはまた、教えられるものではなく、各々が見出し、学び取る体験であるからこそ意味があるのだと思います。

また、表現については、道具や画材の性質、基本的技法の仕組みを知ってもらった上で、各自の創意と工夫に繋げていってもらう事をねらっています。素材の持ち味を知り、生かしていく事は、やがて自分の表現の持ち味へと繋がっていく事でしょう。描きたい衝動と、やわらかい頭、個々の感性を、全力で見守り応援していきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

《講座の概要》

- ・ 幼少から馴染み深いクレヨンにはじまり、絵具、パステル、色鉛筆等、できるだけ多くの画材に触れ、それぞれの持ち味を生かした表現を楽しみます。使用する素材・題材は出来るだけシンプルで身近なものを用い、工夫する事を重んじます。「1つのものから無限を見出す」「ただのモノに意味と生命を宿す」これこそ絵画の醍醐味です。絵を作る道具が「絵具」と「筆」とは限りません。
- ・ 一方では、通常小学校では難しいとされる「透明」水彩や、プロ使用の水彩紙、「水張り」なども体験してもらう予定です。そこには「なるほど」と思わせる良さがあり、画材も道具も紙も、誰かが一生懸命に考案したんだなあ・・・などという想いを巡らせ、道具やものの大切さを知る事にも繋がればと願っています。課題内容、時間配分は、生徒の様子を見ながら柔軟に調整致します。
- ・ 画材と道具は講座を通して使用する基本的なもの（絵具、筆、パレット、雑巾、筆記用具等）をご用意頂きます。その他課題ごとに準備して頂く必要のあるものについては、その都度お知らせ致します。また、画用紙や予備の絵具等の消耗品、課題で様に使用する材料、がばん、筆洗い、その他備品はこちらでご用意致します。尚、本講座では性質上、材料費を見込んだ授業料とさせて頂きますので何卒ご了承下さいませ。（材料費は若干の変更可能性がございますが、500円程度/月を検討致しております。）

（文責 梁川健哲）

「しぜん」 1～6年生

担当 山下育子

近年、比較的穏やかな冬がつづいていますが、今年も暖冬のためにほとんどといってよいほど雪は降りませんでした。自然が大方の姿を隠している冬の季節にあつて、幸いにも、しぜんクラスの日には雪が積もってくれたなら、是非ともみんなで真っ白の「ひみつの森」を、雪を踏みしめながら散策してみたいものだと常々考えておりました。

そして、いよいよ年が明けたクラスの初日には、冬の大粒のボタン雪を肌身をもって体験することになったのでした。それは、森への散策ではなく、別の活動中の出来事でした（後述）。

それでは、しぜんクラスのメンバーが共有した、冬の活動の記録を一部ご紹介します。

——12月のあるクラス テーマ“土の感触を楽しむ・チューリップの球根を植えよう！”

いよいよ、冷たい空気が漂う12月に入り、思いっきり手で土の感触を楽しむための活動をしました。4年生がシャベルでざっくりと耕したあとを、草を抜きながら手を使って土を混ぜ込んでいきます。そこへ、新しい土を加え、空気を含ませながら土壌づくりをします。そしてその後は、春に咲くチューリップの球根を植えていきます。土で手がよごれることを嫌がる子はいません。気持ちいいね～と土の柔らかな手触りを満喫したひと時でした。



プリントを見ましょう



手で耕しはじめます



だんだん柔らかくなるね



フカフカしている



一緒によいしょよいしょ



固い土はシャベルで耕す



手で穴もあくくらい



おだんごもつくれるわ



小さな草もとれたかな



オッケー！耕せたよ



球根をくぼりますよ



球根のふくらみを太陽へ向けて



15～20 cmの深さに植え込む



猫よけの網カバーをかけましょう



水をたっぷりあげます



順番にホースリールを持って



教室に戻ったら、しぜん日記をお返ししました。お互いの発表の内容を聞いてから、先生の質問に手をあげて応えます。



— 12月のあるクラス テーマ “冬いちごを見つけに”

12月16日。この日は、クラス始めに「しぜん日記」の発表をしてもらいました。Y君(1年生)は、家族旅行で淡路島へ行くときに、全長3,911mの世界最長のつり橋(明石海峡大橋)を渡ったことも知らせてくれました。いつものように、ホワイトボードに絵を描きとめながら、みんなにいくつかのクイズを出してみると、早速、クラスに貼っていた日本地図で確かめてみる姿も見られました。

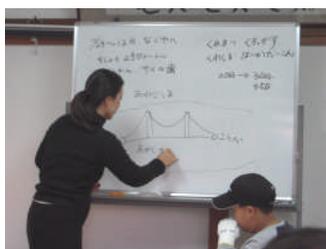
続いて、Mちゃん(2年生)の植物に関する発表がありました。その発表を耳元で聞きながら、秋学期に行ったツリーハウスづくりのあらましを、急ピッチで書き続けているI君(2年生)の微笑ましい姿もあります。

最後には、Mちゃん(1年生)が、植物園で採集したいろいろな種類の落ち葉を「押し葉コレクション」にまとめたものを、みんなに披露してくれました。

クラスの後半は、白い花が秋に咲き12月冬に赤く甘い実ができる、「冬いちご」を見つけにでかけましょう。



淡路島の植物園にもいきました



橋は淡路島と何処をむすぶ橋？



あっ、ここ。神戸



二十日大根を育てた日記も



植物園で拾ったものについて



その場で日記を書き続けます



押し葉コレクションをめくりながら、名前当てクイズ！



林の中を分け入ってみる



冬いちごが実っている



実と蔓と、お母さんにみせたい



甘くて美味しい！



手の平いっぱい収穫



ここにもあったわよ



Nちゃんおばあちゃんから届いたおみかん、美味しかったね！



～初体験！～

—1月のあるクラス テーマ “バウムクーヘンをつくろう！—竹をつかって—”

この日1月13日は、新年明けのお祝いとして、お山の竹を使って「バウムクーヘン」を作ろうね！と前から約束をしていたのでした。子ども達が山の学校に到着する一足先に、「火おこし」と「バウムクーヘンの種づくり」などは予め準備していました。ところが、クラスが始まり、いよいよ活動のためにみんな一斉にお庭へ出てきた頃から、大きな雪の粒が空高くから次から次と舞い降りてきたのでした。

おこした火種は、雪が落ちてくるたびに火の勢いを弱めてしまい、班分けもままならぬくらいに、とにかく急げ！と竹棒を回転させながら塗りはじめたバウムクーヘンの生地の上にも、雪が舞い降りてくる始末……。これではバウムクーヘン作りの取り組みは、断念せざるを得ない・・・と、誰もが思ったほどでした。

しかし、頭に積もらせた白い雪をタオルでお互いに払いのけながらも、生地を一層塗り→火で焼き上げる、ま

た一層塗り重ねていくという繰り返し作業を、子どもたちも大人(太郎先生、亮馬先生、彬先生、私)も全員が、暫く忍耐強く続けていると、気がつく大雪は止んでいました。みんなの情熱が雪の空に伝わったように思えました。

こうして、子ども達が協力して、約20層ほどを焼き重ね続けた根性入りのホカホカ温かいバウムクーヘンは、大きくて見事に仕上がっていました。

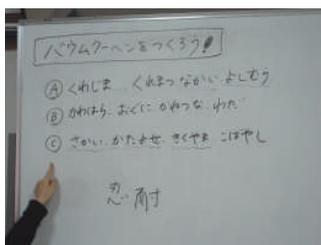
バウムクーヘンが焼き付けられた竹の棒を、グループごとに立てかけて生地を冷ましている間に、熱いココアを注いで体を温めました。次に、ほぼ荒熱が取れた竹棒を生地からそとはずしていくと、手にしたバウムクーヘンの塊はずっしりと重みがありました。そして、分厚めの輪切りにすると、現れた断面には20~25層ほどの年輪が見事に刻まれていました。間もなく、一人ずつが大きなお口をあけて頬張ったことは言うまでもなく、それは言葉にならないほど美味しいものでした。突然の積雪を受け入れつつ、忍の一字で完成にこぎつけた、至福の味とでもいいでしょうか。

バウムクーヘン作りは、竹に種を巻きつけて焼いていく最初の一層、二層、三層目くらいが正に忍耐を必要とするところで、天候のコンディションが整わない日でも諦めない気持ちがあれば必ず完成させられることがわかりました。

この日は、初めてのバウムクーヘン作りでしたが、舞い降りる大雪の中で、冬を身を持って感じるようになった思い出深い一日となりました。



プリントで段取りを確かめます



3班に分かれましょう



竹棒をぐるぐると回転させながら、よく焼いていこう



種を上から重ねて塗るよ



さあ、急いで回そう!



上手く焼けますように



火の勢いのよいところは?



焦げすぎてもだめだしね



雪がやんでよかったね



だいぶ大きくなってきた



ミルクココアで温まりながら



そろそろ冷めたかな



最後まで焼き続けたね



年輪がついてずっしり重い



ぼくのバウムクーヘン!



お味は最高!



手が温かくなってきた



お母さんにお土産にしたいね



ココアのおかわりある?

「センス・オブ・ワンダーの思い出」——

子どもの頃、私はじっとしていない性格だったので、近くの山に入っては一人で探検しながら真っ暗になるまで遊びました。夕方になっても帰ってこない私を、両親二人がいつも探し回っていたそうです。母の困った表情を見てからは、西の空にオレンジ色の太陽が沈む夕陽を見ると、帰り道で見つけたジュズダマ(植物)を母へのお土産にするために右手にぎゅっと握りしめて家路を急ぐ、そんな幼少期でした。

自然の植物や生き物との思い出もたくさんあります。自宅の畑の隅っこに、春が来たことを知らせてくれるムラサキカタバミは、クレパスの中でも特別だったピンク色で、幼い私にとって近しい友達のような存在でした。隣に咲いていたオオイヌノフグリのブルーの色は濃い空の色と同じで、よく私が身につけていた春のスカートの色と同じであったことも何だか嬉しくなってくるのです。

ある時、素手で捕まえたシジミチョウを母に見せようと、家の勝手口まで戻ってきた時のことでした。その近くにはいつも巣づくりをしているクモの主がいたのですが、私の帰りを待っていたように手前に出て来ていたので、何気なくそのクモに、「ほら、こんなシジミチョウを捕まえたのよ」と見せたところ、驚いたことにクモはさっと手を伸ばして掴み、「ありがとう！」と言わんばかりに、暗くて見えない巣の奥までシジミチョウを持って引っ込んでしまったのです。

一瞬の出来事なので大変驚きました。すぐに母に訴えましたがどうしようもありません。クモがチョウを食料にすることもその時に知ることとなり、シジミチョウがクモのエサになってしまったことを、小さいながら数日の間悔やんでいたことは、今でも心に残っているのです。

子ども達は、センス・オブ・ワンダー(自然界の美しさ、神秘さ、不思議さに目を見張る感性のこと)をととても豊かに備えており、いつも生き生きとして新鮮な驚きと感激に満ち溢れています。幼稚園の子ども達を見ている、目はキラキラと輝いていて、面白いもの、珍しいものを見つけると夢中になり五感をとぎすまして見入っている真剣な表情は何より尊いのではないかと思います。

子ども達を取り巻く自然界には、すでに彼らの知っているもの、知らないもの、面白いもの、怖いもの、残酷なもの、痛いものなどさまざまありますが、それらを子どもなりに体験していくことで更に好奇心の扉が開かれていくものだと信じています。

大人に近づくと、どうしても小さな頃に溢れていたはずの好奇心も薄れがちですが、特に心の柔らかな幼少期から小学生時代の頃には、自然との結びつきを豊かに感じられるように守り育てたいものだと思います。成長後に、目の前にさまざまな支障が立ちはだかった時にも、人間の力を超えた大きな自然の懐を思い起こすことができたなら、再びそこから必ず生きる希望が湧き上がってくるに違いありません。

「来年度のしぜんクラスについて」——

「山の学校」を開校するにあたり、太郎先生と様々な打ち合わせをする中で、小学生クラスは「<ことば>と<かず>のほかに、お山の自然の中で学ぶ<しぜん>というクラスがあればいいわね」と、ふと口にしてしまった私が、しぜんクラスを担当して早6年間が経ちました。

当初はせいぜい5名ほどの人数でしたが、毎回季節の草花やドングリの発芽を見つけたり、森の中では鳥の声に耳をそばだてたりしながら、私は子どもたちと同じ目線で、お互いの発見や感動を分かち合いながら濃い時間を過ごしている感覚がありました。センス・オブ・ワンダーとは本来、そのように息を潜めて小さな自然を感じたり、静かに空を眺めていたりする大変内面的な充足感に満ちた感覚に溢れているはずのものではないかと思えます。

その後、しぜんクラスはいつの間にか15名近くの大所帯となり、大勢が体験できるイベント形式の取り組みが主となってきました。

来年度春学期からは再び原点に戻り、スタート当初の少人数制で(定員5名)複数のクラスを設置できればと思いますし、幸いご協力頂ける先生方も揃いました。そこで、後々につづく山の学校の発展を考えつつ、新年度からは、私の後を引き継いで「しぜんクラス」を担って下さる感性豊かな先生方にクラスをバトンタッチして、今後は一歩下がった立場でみんなを見守らせていただくことに致しました。「しぜんクラス」の継続、入会をご希望の方、また関係保護者の皆さまにはこの辺りを何卒ご理解下さいますよう、この場をお借りしましてご挨拶とさせていただきます。

この先も、子どもたちと先生が輪になって語り合うセンス・オブ・ワンダーに満ちたクラスであり続けることを心から祈りたいと思います。

(文責 山下育子)

『ことば』 1年生

担当 福西亮馬

問題

ビルの6階で窓を眺めていた男が、おもむろに窓を開けて向こう側に飛び降りました。けれどもその男は無事でした。なぜでしょうか？

これは、今クラスの中で流行っている、『推理クイズ』（原題：“Lateral Thinking Puzzle”（水平思考—広く物を考えるパズル））というものです。生徒たちは、出題者の私に向かって、「はい」か「いいえ」で答えられるような質問をしていきます。たとえば、「（生徒）ビルの下にはトランポリンみたいな物がありましたか？——（私）いいえ」といったように。そのようにだんだんと可能性を絞り込んでいき、最後には出題者の思っている答えを見つけ出すというクイズです。秋学期にした『二十の扉』からの続きで、これが思いのほかヒットして、冬学期のうちに「もっとしたい！」という定番になりました。

このクイズの面白さの秘訣は、何度でも質問を（それこそ無限回）繰り返しても良いという点にあると思います。その代わりヒントも自分で質問して手に入れなければなりません。質問しないと時間は経つ一方です。また一人のした質問が参加者全員の利益になるというのも、このクイズの仕掛けです。

1年生たちは、さすがと言うべきか、大人顔負けの勢いで質問を出してくれます。同時に三人が「はい！」「はい！」「はい！」と手を上げた時などは交通整理が大変になって来るほどです。

時にはリーダーが現れて「作戦会議！」が召集されることもあります。問題文の一字一句を丸で囲んでいく生徒もいます。またある生徒は速記係を買って出てくれて、メモを見ながら、「この質問は問題に関係ありますか？ この質問は……」と一個ずつ要点を整理してくれます。さらには、「こうなったら一度“現場”を再現してみよう！」と張り切って登場人物になってみたり……と、思いがけない方向にまで展開していきます。こうした反応は一見、不真面目そうにも取られますが、中身はいつになく真剣です。そのような好奇心がいつまでも……と思いながら、今は目を細めて見えています。

さて、推理クイズが流行る一方で、逆に反省点もあります。というのは、これまでの自分を振り返ってみると、生徒たちから質問が出てくるのを十分に待ちきれないでいたということです。つい結論を急いでしまったり、良かれと思ってヒントを出したりしたことが、後々になってから「ねえ先生、早くヒントちょうだい！」という気持ちに変えてしまっていたのではないかと察するのです。

そう思っている矢先に、ある一つのエピソードを耳にしたのでした。クラスのKちゃんが、ある日お家で「世界にはイタリアとかフランスとか、いろんな国があるけれど、1・2・3……の読み方も、国によって違うの？ それはどんな風に違うの？」と質問したそうです。そこで親御さんはこう言ったそうです、「それだったら家にその国の辞書があるから、もし知りたかったら自分で調べなさい」と。

するとKちゃんはむしろ喜び勇んで、辞書を引っ張り出してきたそうです。「打てば響く」とはこのことであり、いわば「かわいい子には旅をさせよ」というこの配慮は、無責任とはまったくの対極です。Kちゃんが自分の疑問に自分で責任を持つとする姿を、親御さんは見守っておられたのだと思います。

私は、もしKちゃんが最初に「えー」と言っている、それはそれで一向に構わなかったと思います。その場合は「ただ言ってみただけ」に過ぎないからです。問題は、そのような疑問の深淺を推し量らずに大人がもし一方的に介入していればどうなっただろうか、という点にあります。すっかり答を教えたもらった後で、子どもたちはこう思うのではないのでしょうか——（どんなことも、自分が知るよりもとの昔に分かってしまっているんだ……）と。ところが実際はそんなことはなく、世の中はまだ知られていないことだらけです。『混沌の死』ということわざがありますが、こと好奇心に関しては、芽を摘まないことは、伸ばすことと同じかそれ以上の難しさがあると言えます。それだけに、Kちゃんが親御さんから貴重なチャンスを与えてもらったことには、「すごい！」という気持ちが走ったのでした。

さて、推理クイズの答が分かった時の達成感、満足感は、「もっとしよう！」の一言に表されていると思います。やはり子どもたちは本来一生懸命であって、それとどう付き合うかが、私たちの側に残される課題なのだろうと思います。

そうするうちに、生徒の方でもいつしか推理クイズの本を持って来てくれたり、自分で問題を作ってくれたりするようになりました。実際、次のページの問題はN君が考えてくれたものです。紙面だとN君と直接質問を交わせないのが残念ですが、ぜひみなさんも一度挑戦なさってみてください。

出題者：N君

かわいい女の子がいました。いえにいました。わたしはまいごといいました。
なぜまいごといいましたか。

「その女の子は、誘拐されたのですか?」「いいえ」

「女の子がいるのは、近所の人の家ですか?」「いいえ」

「知らない人の家ですか?」「いいえ」

「その家は、自分の家ですか?」「はい、そうです」

「女の子は、泣いていますか?」「いいえ、笑っています」

「女の子は、本当に迷子ですか?」「いいえ、迷子(という状況)ではありません」

「それなのに、『わたしはまいごと』と言っているのですか?」「はい」

最後になりますが、言葉というものは、相手に伝えたいという「思い」がまず先にあって生じ、成長するように思います。その点、言葉は心に近いのかもしれませんが。上の問題を出したN君にしても、それに対し必死に答を言い当てようとする(つまり「ぼくはこういうことを言いたい!」と聞いてもらおうとする)側にしても、どこかお互いに自分の言葉の「いま」を確かめ合い、育て合っているように思います。そこにもし、まだ伝えきれずにいたことがあるにしても、それを誰か大人によって最後まで受け止めてもらえたという安堵が加わるならば、その思い出は、自分自身の言葉を紡ぎ出していく「源」として残るはずだと信じます。

そのことは、授業の開始早々、先週の出来事を話してくれたり、そのことを俳句にして発表してくれたりする時にも同じように感じます。また素話を始める際には、むしろ私の方が受け止めてもらい、みんなから言葉に対する自信と栄養を与えてもらいました。とても感謝しています。

この36週の言葉の思い出は、私にとってもかけがえのない宝物です。これからも新しい心で好奇心いっぱい2年生へと羽ばたいていってくれることを願っています。

(文責 福西亮馬)

『自分で考える喜び』

文・山下太郎

自分で考える喜びというと聞こえはよいが、これほど忍耐を要することはない。

数学で言えば、10分考えてすぐに答えをみて解法を理解するのも一つだが、それが「喜び」に直結しているかどうか。私の思う「考える喜び」は想定しているタイムスパンがもっと長い。

数学でいえば、解けない問題に出くわしたとき心がときめいてほしい。それこそ「寝ても覚めても」その問題のことを考え続けることが、本当に「考える」ことである。また、その結果正解を得たときの喜びも大きい。

正解にたどりついたかどうかは二の次で、あきらめずに考え抜くことは、将来自分で問題を発見し、それに挑戦する前段階として必要な精神の修行である。

今の時代、学校で指導する方も、される方も、せっかちに見える。今、山の学校で取り組んでいる「推理クイズ」でいえば、すぐにヒントを求めたがる態度はどうか? わからない経験とじっくりつきあう小学生クラスの子どもたちをみていると、頼もしく思えてくる。

国語でいえば、他人の解釈を一生懸命暗記しても何もならない。読書百遍という言葉は真実である。国語ほど「正解」のない科目はないが、教育界はどうしても「正解」を教えないと気が済まない。

100点満点の中で50歩100歩の争いをするよりも、「自己採点で」1万点、100万点!の答案を目指してほしい。英語なら英文でエッセイを書いてみてはどうか。日本で言う英作文とは、他人の書いた日本語の翻訳以上の意味はない。

人間なら、機械が採点できない世界でとことん遊んでほしい。国語では本を読み、内容を要約し、添削を受けるといった基本を繰り返す、同時に自分の考えを紙に書いて表現してほしい。

どの科目も、自分で考える喜びとリンクさせるとき、絵を描くのと喜びが手にはいる。そこに勉強の本当のおもしろさはあると思う。大学にはいるまではたしかに「正解」との上手なつきあい方を学ぶのも大事ではあるが、それに終始し納得してはいけぬ。

学校が誘導しなくても、山の学校の生徒なら、家で本を読み、日記に感想を書くくらいは朝飯前であってほしい。数学なら、難しい問題に出会って感激してほしい。一つの問題に何日かかっても、考え抜いたプロセスすべてが自分の血となり肉となる。

偏差値に反映しないことは何もしない人間にはならないこと。他人の評価は横へ置き、自分が興味を持ったことに、とことん打ち込むべし。

(文責 山下太郎)

『ことば』 2年生 担当 高木 あきら 彬

雲を眺めるのは楽しいものです。あるときはウサギに見えたり、あるときは走っている人に見えたり、またあるときには誰かの横顔に見えたりします。その横顔は、だんだん口が歪んできて、いつのまにか横顔ではなくなり、気づくと鳥になっています。

最後に雲を長い時間かけて眺めたのはいつだったのでしょうか。私は、もうだいぶ前のような気がしません。でもこのクラスの子どもたちが眺めたのは、今日、あるいはついさっきのことかもしれません。

このクラスで金子みすずの詩「不思議」を朗読したとき、こんなことがありました。「私は不思議でたまらない、／ 黒い雲からふる雨が、／ 銀にひかっていることが。」こう朗読して、その雲の話になったとき、一人の生徒が、最近自分が出会った雲たちのことを教えてくれました。長い口をもったワニの雲、前脚をふり上げたティラノサウルスの雲、前かがみになっている天使の雲……。私が「『天使の雲』ってどんな雲？」と尋ねると、彼は羽の代わりに両腕を肩の上あたりで曲げて、前かがみの天使を真似てくれました。もう一人の生徒が「じゃあ『ティラノサウルスの雲』は？」と尋ねると、その彼は、両手をバツとあげて、なんともいえない複雑な表情をつくって、その雲を再現してくれました。

もちろんふざけているわけではありません。彼は真剣です。また、なにかおもしろいことを言ってやろう、などと計っているのでもありません。彼は自分が見たものを見たまま表現しているだけのようなのです。彼は実際に、ある日の空にその雲を見たし、また彼が見たその瞬間においては、それは雲ではなく真正銘のワニであり、ティラノサウルスであり、天使だったのでしょ。

このクラスでは、一年を通して、詩の朗読と筆写、詩作、絵本を読むことに取り組んできました。そのなかで確信をえたのは、彼らが生来の詩人だということです。こちらの予想は、つねに良い意味で裏切られ続けます。わたしにできることは、こうした豊かな詩性の発露のための、きっかけを準備することだけです。

山の学校への石段を登りながら、疲れて立ち止まって後ろを振り返ると、そこには遙か反対側の山々の稜線を越えていく、空と雲のパノラマが広がっています。彼らはこうした環境から、つねに何かを感じ、学びとっているのでしょう。

(文責 高木 彬)

『ことば』 3年生 担当 浅野直樹

春から担当することになったこのクラスのみならずとも、ともに夏を過ごし、秋を通り抜け、寒い冬のただ中にこの文章を書いております。そしてこの『山びこ通信』がみなさまのお手元に届く頃には再び春を迎えつつあることでしょう。

秋学期には途中で今後の予定を決めましたが、今学期は最初の授業時にみんなで話し合って予定を決め、現在のところその通りに進んでおります。最初に予定を決めても何ヶ月か経つと気が変わってしまうのではないかという心配は杞憂でした。むしろ先々の活動内容を楽しみにしてくれていたようで、自分の言ったことは守るということを通して「ことば」の重みを実感してくれたのではないかと思います。

さてその活動内容はと言いますと、推理クイズにお正月のカルタ大会、そして最大の取り組みである絵本作りが現在進行中です。どれもみんなで参加して作り上げる授業です。

推理クイズには、柔軟な思考を養うだけでなく、人の話をじっくりと聞いたり、相手にわかるように説明したりする力がつくという効用があるのではないかと感じました。推理クイズをいくつか聞くと、まだ知らない人に試したくなります。そして手持ちのネタが尽きると、自分で創作したくなります。実際このクラスでも、率先して誰かから聞いた問題を披露したり、実体験を基にオリジナルの問題を作ってくれたりしました。

絵本作りもまた同じかもしれません。相手に伝えたいことを確実に伝えるためには、セリフや文の細部にまでこだわる必要があります。漢字の送り仮名や言い回しの自然さについて何度も何度も質問を受けました。それくらい丁寧に作っているのです、ほんの数ページを完成させるだけでもかなりの時間がかかり、「絵本を作るのって大変なんやなあ」という声が思わず漏れたりもしました。

こうした活動が、ご家庭や学校での読書や漢字ドリルなどに取り組むための刺激になれば幸いです。

(文責 浅野直樹)

このクラスでは、一年を通して、詩の朗読と漢字の成り立ちに取り組んできました。またそれに加え、冬学期では、空想の道具を紙に描いて、それに説明文を付すというを行いました。

冬学期の最初の授業で朗読した、柳曠(やなぎ ひろし)の『山の上で』という詩は、いわゆる「数え歌」でした。一つ、二つ…とテンポが良いこともあって、生徒たちは気持ちがよさそうに朗読してくれました。私も混じって読むと、どこか晴れ晴れとした、朗らかな気持ちになりました。

詩の取り組みでは、意味を考えることと同時に、朗読することを大切にしてきました。まずはただ無心に声に出すことで、「音」としての言葉のリズムや美しさに触れます。とくにこの数え歌では、意味よりも音に重点があります。

去年の四月にこのクラスで詩の朗読の取り組みをはじめた頃は、今にして思えば、声はおぼつかなく、全部を一定の調子で続けて読んでしまうので、うまくリズムがとれないときもありました。しかし今では、センテンスごとに一拍空けて、リズムをとりながら読めるようになりました。一年で本当に成長されたのだと思います。

漢字の成り立ちの取り組みは、毎回四文字から五文字ずつながら、それが積もりに積もって、結構な文字数になりました。そこで、冬学期の途中からは、毎回配っているプリントに「チャレンジ」という欄をもうけることにしました。そこには、成り立ちの図も、意味を記した文章も、何も書かれておらず、ただ漢字が一文字あるだけです。これまで学んできた漢字の成り立ちの知識とセンスを総動員して、その漢字がどのような成り立ちと意味をもっているかを、ここで考えるのです。

たとえば「鬪」という字について、ある生徒は、「たたかう」という意味から、「豆」を「盾」、「寸」を「剣」に見立ててくれました。その後、「寸」の形が「ほこ(戈、矛)」に近いことを思い出し、「剣」を「戈」に修正してくれます。細かいことを言えば、「鬪」の正字は「鬪」であり、その「斲(タク)」の旁(つくり)は「おの(斤、斧)」なのですが、それは常用漢字の「鬪」からは分からないことでもあります。むしろ「鬪」のなかに武器と防具を読みとった彼のセンスが卓抜だと思いました。またその生徒は、「盾」と「矛」から展開して、「先生、知ってる?」と言って、「矛盾」の故事を説明しはじめてくれました。こうした自発的な展開を、とても嬉しく思います。

自発的な展開といえば、他にもいろいろと印象に残っていることがあります。漢字の成立の歴史が、形の簡略化(抽象化)の歴史でもあることを知って、そこから彼らが、現行の漢字をさらに簡略化させて、未来の漢字を創ってくれたこと。あるいは、これまで学んできた漢字を駆使して、新しい漢字を創造してくれたこと。そのどれもが、貴重な取り組みでした。ちなみに、彼らの創ってくれた漢字のなかで、もっとも画数の多いものは、なんと一文字で387画(読みは「さいきょうおう」)でした。

彼らの想像力には尽きることはありません。そこで、作文のきっかけにも、こうした創造的な遊びの要素を利用できないかと考えました。折しも、彼らが休み時間に『ドラえもん ひみつ道具カタログ』という本に夢中になっているのを目撃しました。その本には、ドラえもんの道具が一ページに一つずつ、文章とイラストで紹介されていました。そこで、冬学期では、彼らオリジナルの「ひみつ道具」を創ってもらいました。自分で考えた空想の道具のイラストを描いて、それに説明文をつけるのです。

これは相当に人気を博しました。熱中しすぎて、授業時間をオーバーすることも、しばしばありました。しかし、次から次へと道具のアイデアが飛びだしてくるのには、本当に驚かされました。そして自分が発明したその道具を相手(さしあたっては、クラスメイトと私)に伝えるために、非常に熱心に説明の文章を書いてくれました。右の写真は、彼らの作品の一部です。

このように展開してきた「ことば4年生(A)」も、今この文章を書いている時点で、あと三回を残すのみとなりました。過ぎてしまえば一年は束の間です。貴重な時間はこのようにして過ぎ去っていくのだと、なんだか複雑な思いですが、あとには同じ時間を共有した記憶と、生徒たちの厳然たる成長が刻まれています。

一つ、日向(ひなた)の山道を、
二つ、ふたりで行(ゆ)きました。
三つ、港に蒸気船、
四つ、よそから着きました。
五つ、いそいで見に行(ゆ)けば、
六つ、むこうの青空に、
七つ、ならんだ白い雲、
八つ、山家(やまが)のおさの音、
九つ、ここまで聞えます。

とんとんからりこ、
とんからり。

とおに港も暮れました。



このクラスでは楽しく作文に取り組んでいます。

2年生のJちゃんがこの間書き上げてくれた『お正月まであと何分?』という作品は、年越しそばを食べる時に、今年があと10分で終わると信じられないきらり（主人公）が、まだ30分あるはずだと兄弟げんかをしている光景から始まります。さてお正月になったところで、突然1本の電話がかかってきます。それは『エコロジー会社』からで、何でも「お正月を教えてあげる」と言います。きらりは、二人の兄妹と、その会社を訪問しますが、三人が案内されたのはなぜか『ドキランド』という場所でした。ところがきらりたちの方もまた、会社の人の説明をそっちのけで自由に動き回るので、とうとう「お願いですから、もう帰って下さい」と懇願され追い出されてしまう始末。結局、「お正月って何だったんだろう?」という落ちが、元気なJちゃんらしくて、つい笑いをこらえてしまいます。

一方、4年生のRちゃんは、この冬学期に入ってからずっと一つの作品『青い鳥の幸せ』を書き綴っています。メーテルリンクの『青い鳥』からの印象を元に、「これは今までで一番の作品にしたい!」という意気込みで、毎週のように机に向っています。書き出しは、主人公の青がいじめられている鳥を見つけるところから始まります。自分からは何も悪いことをしていない者の心の平静を乱そうとする「心のとげ」は、今の学校でもRちゃんの向き合っているテーマだと察します。またRちゃんは、「青い鳥をつかまえば幸せになれる」という人間の視点ではなくて、「青い鳥を幸せにしてあげるには、どうすれば良いのか」という青い鳥の視点から書いており、だから『青い鳥の幸せ』なのです。詳しくは「山の学校 Weblog」の1月の記事を、ご興味のある方は、ぜひご覧になってみて下さい。メーテルリンクをお手本にしながら、Rちゃんならではの優しい独創性に満ち溢れています。

そして途中からクラスに参加してくれた2年生のKちゃんも、この前『うちもゲームがほしいよお〜』という話を書き上げてくれました。Kちゃんは字がきれいです。お友達の家でWiiをさせてもらって、「楽しかった〜。」と言って帰ってきたKちゃん。次の朝、パパを猫なで声で丸め込もうとしますが「だめだめ」の一点張り。そこでお母さんに聞いても「あなたにはまだ早い」とのこと。「だって、かのちゃんだって持っているよ」「だったら、あなただけかのちゃん家の子にならなさい」——と、このようなかけ合いは、どこの家庭でも一度は演じられるものではないでしょうか?——ところがKちゃんはその次に、「いや! いやだよ!! そんなのいや! 私はママとパパの子だもーん」と言って泣き出してしまいます。実際の作者がその展開を微笑みつつ書いているところに、まさしく家族の絆を思わせます。そして話の終わらせ方も、結局ゲームを買ってもらふ安易な解決はせずに、「うちにはいつになったらゲームが来るんだろう?」というユーモアでしめくくっています。作者のその内なる公平さには共感が湧きます。筋がしっかりしていて、とても2年生が書いたようには思えないほどよく書けていました。

さて、このクラスでも『推理クイズ』がはやっています。駆け足で一問だけ紹介したいと思います。

ある夜、ビルの中で突然、「ジャック! うたないで!」というさげび声と、一発の銃声が聞こえました。ビルの警備員が現場へただちに向けつけた所、たおれて死んでいる女のひとと、そのほかに三人の人物（宅配の人、掃除の人、工事の人）が立っていました。警備員は、その三人の顔をちらっと見るなりすぐに「お前だな!」と言って、宅配の人をつかまえました。事実その人が犯人でした。でも警備員はなぜそんなに早く犯人を見抜けたのでしょうか?

この問題はなかなか答が出ず、それだけに夢中になって考えてくれました。「配達の人には銃を持っていましたか?」「いいえ。顔を見ただけで犯人だと分かりました」「配達の方は、ジャックという名前ですか?」「はい、その通りです!」……と、ここまではじきに分かったのですが、そこからがなかなか進展しません。一人二十回ぐらいは質問したのではないかと思います。とうとうその日は分からずじまいで、次の週には、登場人物の配役を決めて再現ドラマまでしました（確かに、教室にいるのがKちゃんJちゃんRちゃん私の四人で、もし警備員を抜きにすれば再現できます。でも「私」の配役がどれになるかで、全く謎に包まれてしまいます。それはなぜでしょうか?——という問題でした）。

「あ! 分かった〜!」と、ついに歓声を上げたのは、Kちゃんでした。「え? どういうこと?」と、あとの二人が耳を貸すなり、ひそひそ……。そしてみんな「それ! 間違いない!」と一致した答を、「せーの!」で言ってくれました。もちろん「大正解」でした。すると「もう一問したい!」「次はどんな問題?」とますます乗ってくれる様子でした。いつもそんな調子なので、すぐに時間が来てしまいます。どのクラスもそうですが、大変にやり甲斐を感じる光栄なクラスです。

(文責 福西亮馬)

このクラスでは秋学期から引き続き「書くこと」に集中的に取り組んでいます。その取り組みの延長上で、今回は辻勲平君にこの『山びこ通信』に寄稿してもらいました。突然の依頼にもかかわらず快く引き受けてくれたことに感謝します。そちらも合わせてお読みください。

まず、書くことについては学習記録表があります。数行でよいとはいえ、毎日記録をつけるのは面倒なことです。そしてすぐに何らかの効果が目に見えるわけではありません。それでも書き続けると何かが変わります。授業の冒頭でその週の記録表を確認し、わかりづらい箇所は質問するようにしているのですが、そこでのやり取りを次回以降によく反映させてくれます。例えばある日の記録に「けいどろをした。」とあり、「けいどろって何？」と質問すると、その次の週の記録では「けいどろ（けいさつとどろぼうに分かれて追いかける遊び）をした。」と書いてくれているのです。そうしたことが積み重なって、数ヶ月経つと変化が目に見えるようになるのでしょうか。

さらに本格的な作文をするときも要領は同じです。今学期は小学生新聞などを活用しながら実際的な問題について、1つのテーマにつき3,4回分の時間を使って論じてもらいました。初回には問題となる事柄についての記事を紹介し、質問を受け付け、自分の意見を口頭で発表してもらい、それについて今度はこちらから質問をします。2回目には前回の質問に答える形でさらなる資料を用意し、それを踏まえた上でさらに自分の意見を練ってもらいます。3回目からは自分の意見を書き、それを読んでわかりづらい点について討議するということの繰り返しです。

書くことを重視しているといってもそれ以前に書くべき内容があります。こちらとしては、表面的な書く技術だけでなく、物事の本質を考える力を養いたいのです。最初のやり取りではお互いに遠慮せず、わからないところはわからないとはっきり言うので、かなり突っ込んだ議論になります。あるときには「小学校で生徒が携帯電話を持ち込むのを禁止するのは是か非か」というテーマについて書こうとしたのですが、議論の結果、そもそもこのテーマは大して重要でないという結論に落ち着いたので結局書くことはしませんでした。また別のときには、花粉症について数十ページに及ぶ大量の資料を渡したのですが、そこから必要とする情報をすぐに取り出すということもありました。こうした力は入試の小論文などでは問われませんが、実生活においては非常に重要な要素となり得ます。とりわけ情報があふれる現代においては、取捨選択をすることの比重は大きくなってきています。

また、資料を読み解く際には統計的な資料も理解する必要があるので数学的な力も問われます。例えば子どもの体力低下がテーマだったときには、文部科学省による調査の実測値を渡しましたし、花粉症について日本全国で何人くらいの患者がいるかも調べました。知りたいと思うことがあるなら、それが言葉で書かれていようが数字で表されていようが関係なく、中身を知りたいと思うのは当然の成り行きです。「ことば」と「かず」、「文系」と「理系」などと区別するのは大人の都合に過ぎません。聞くところによると「かず」のクラスでもことばを用いて説明するというのをされているようで、そちらでは数学的な装いの中で国語的な力も問われていることでしょう。

話を書くことに戻しますと、自分の意見を過不足なくおよそ論理的な順序で盛り込めるようにはなってきました。「てにをは」に不備があったり、段落構成に難があったりと、まだまだ荒削りではありますが、内容面で目を見張るものがあります。お仕着せの作文ではなく、自分の力で考えたことを苦労しながら文字にしている様子は、この『山びこ通信』の辻勲平君の文章からも窺えることでしょう。(次ページ)

五年 辻勲平

山の学校でしたことは、いままで「かず」、「ことば」、「しぜん」と、全部やっていました。

「かず」では、ドリルばかりやっていて、それで今では50さつぐらいになりました。一番おもしろかった思い出は、かべにグラフをはってドリルをやるごとにグラフがふえていき、最高てんじょうの真ん中くらいまでできたことをおぼえています。結果が一番でした。今では、論理パズルなどをやっていて、始めの時は、わからなかったんですが、今では、2、3分考えたら分かってくるぐらいまでできました。それにほかには、すい理クイズなどがあります。

「ことば」は、1、2年の時、漢字をやっていて、夏休みなどの時にしか作文はやっていませんでした。それで先生がかわり、今では、作文もだいぶかけるようになってきました。作文を何枚もやっているうちに、自然と書けるようになってきました。最近では、新聞にのっていることを作文にしたりしています。

「しぜん」では、植物の名前とかをしらべたりしていました。今では、やめました。3、4年の時、「しぜん」できちをつくったりしたのをおぼえています。いろんなことをしました。

年下の人へのアドバイスは、「かず」では、山の学校では論理パズルなどをするだけではなく、家でドリルをやったほうが良いと思います。なぜかという、論理だけやっても、中身はきたえられるけど外もきたえておかないと、学校でこまるのは自分なのだから、家で1年なら1年のドリルだけではなくて、2年、3年といったほうが1年のドリルばかりしているとあきてくるのでいいし、塾にっている人よりもさきさきすすめるし、いろんな問題ができておもしろいので、1年だからじゃなくて1年のあいだに1年のがカンペキだったら2年というふうにいけばいいと思います。「ことば」でも進んで作文をしたりしても家でやってもいいと思います。一言で言えばつまかさねが大事ということが言えます。

保護者の方へのコメントは、保護者のかたは塾にいかせたりしているのがたぶん多いと思います。けど塾だけでしか勉強ができないのではなく、本屋でもドリルをかえば塾と同じこともできるし安くつくので塾だけっていうのも考えておいたほうが良いと思います。それに、はっきりいうとお金がない人でも、ドリルだと200円ぐらいですむからいいと思います。あとは、子どものやる気です。

山の学校と、学校や塾との違いについては、一言でいえば、学校の中の学校、くわしく言えば学校×塾＝山の学校みたいなものとしかいいようがないです。

最後に言えば、つまかさねが大事ということと、塾へいかななくてもドリルがあればいいと思います。

～講師によるコメント

これは当事者からの貴重な発言で、『山びこ通信』のこと以前に私自身が読み入ってしまいました。積み重ねが大事だということも、学習記録表や「かず」のドリルを積み重ねた彼の言葉だけに重みがあります。

「自分でドリルをすればよい」という後輩や保護者の方へのアドバイスも、一見冷淡に聞こえますが、実体験に基づきつつ簡潔に学びの本質を表しています。本人の意に反して無理やり学ばせることなど、たとえできたとしてもほとんどできませんが、本人にやる気さえあればどんなことから何らかのことを学ぶことができます。

究極的には自分で学ぶよりほかはないとすれば、山の学校では何をするのでしょうか。その問いにも「中身を鍛える」ことだと答えてくれています。私なりに言い換えると「自分で考える力を養う」ことです。山の学校には週にせいぜい数回しか来ないので、そこだけでの取り組みには自ずと限界があります。しかし中身を鍛えて自分で考える力を身につけてくれたら、無限の可能性が開けます。「学校×塾＝山の学校」という表現も、このあたりのことを含んでいるのかもしれない。

(文責 浅野直樹)

この作文のクラスでは、秋学期までは、自己紹介文や小説、夏休みの思い出など、どちらかといえば自己表現に重きをおくような文章を書いてきてもらいました。そこで、秋学期の終わりから冬学期を通じては、野尻抱影のエッセイ『赤い手鏡』と、宮沢賢治の小説『銀河鉄道の夜』をテキストとしながら、他者の表現から理解したことを文章化する方へ重心をシフトしました。

とはいえ、その文章化をするのは生徒自身であり、その意味では自己表現であることに変わりありません。極端な例かもしれませんが、小林秀雄の『モーツァルト』の素晴しさは、その偉大な作曲家の音楽の素晴しさ以上に、その音楽を小林秀雄自身がどのように感じているかに由来しています。つまり彼の感覚の鋭さ、その表現の美しさにこそ、『モーツァルト』が読み継がれる理由があります。「ゲオンがこれを *tristesse allante* と呼んでいるのを、読んだ時、僕は自分の感じを一と言で言われた様に思い驚いた。確かに、モーツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない。涙の裡に玩弄するには美しすぎる。」

他者表現の理解のうえに自己表現をおこなうことは、作文にかぎらず、広くコミュニケーションにおいて大切なことでもあります。生徒の彼の豊かな表現力が、そこでどのように展開していくのか、毎回のクラスに挑むのが刺激的で楽しみでした。

彼が具体的にどのような文章を書いたのかは、私がここで述べ立てるより、彼自身の文章を読んだほうが、その良さが伝わると思います。たとえば後で引用するのは、野尻抱影の『赤い手鏡』で「私はしばらくぼかんとしていた。次いで、涙が流れて留まらなかった」と語られていたような、思考が追いつかないほどの感動について、彼自身の体験に引きつけて作文してもらったものです。

彼が書いてくれたのは、レオナルド・ダ・ヴィンチの「ラロックの聖母」を観たときのことです。彼自身の感動が、作品が発見された経緯などを交えた程よい長さのプロローグの後に配されることで、より鮮明に伝わってきます。これからも、こうした感受性と表現力の豊かさに、より磨きをかけていってほしいと思います。（漢字などの表記はすべて原文のままです。）

『ラロックの聖母を見て』

U・K

ぼくが感動したことは、レオナルド・ダ・ヴィンチが書いたと言われる「ラロックの聖母」をテレビで見たことです。

「ラロックの聖母」があったのは、イタリアのラロック村です。おもいもかけないことに村長の古いリサイクルショップにありました。

ある日、三人の男性がそこへ来て、その絵を見て、「売ってほしい。」と、言ったそうです。ダ・ヴィンチが書いたものだったら、数十億円になるのですが、なにも知らない村長はその絵をたった三万円で売りました。この三万円はがくぶちのねだんです。つまり村長はがくぶちだけを売ったようなもの。それもそのはず、絵は長い間手をかけていないので真っ黒だったのです。村長は「その三人はがくぶちがほしかったのではないか。」と言っています。さらに「絵をすてていなければ私もうれしい。」と言っています。これは自分が売った物だからあまりすててほしくなかったからでしょう。あとから分かりましたが、その三人はがくぶちがほしかったのではなくて絵がほしかったそうです。テレビ番組の司会者は村長から三人のうち、一人の住所を教えてくださいその人をたずねました。その人は「大切なので二人が来るまでまってください。」と言いました。その人は二人に電話をかけました。しばらくまっていると、その二人が来ました。三人の男性で相談した結果、特別に見せてもらうことになりました。

ラロックの聖母は赤んぼうのヨハネとキリストがマリアのちちをのんでいる絵です。それはよごれて真っ黒になっていました。ですがぼくはあつとうてきな存在感を、感じました。なぜならヨハネとキリストの顔が、人みたいな神みtainなひょうじょうをしているからです。そしてマリアが着ている服のしわが細かくて、本物みたいだからです。また真っ黒なので存在感がましました。

この「ラロックの聖母」を見た時、感動したのです。

（文責 高木 彬）

『かず』 1年生 担当 うえおなのみち 上尾真道／福西亮馬

去年の春から始まった「かず」の授業も、もうじき一年が経とうとしています。振り返れば、はじめは本当に簡単な迷路や間違い探しに取り組んでもらい、目の前に課題に集中する姿勢や、ひらめく楽しみ、問題が解けたときの喜びをわかってもらうことから始めたのです。一年の間に、足し算や引き算の練習が始まり、また、迷路や間違い探しも徐々にレベルアップしていき、一筋縄でいかない問題に子供たちが頭を抱える場面もだんだんと増えていったように思います。けれども、それでも毎回時間いっぱいまで問題にかじりつく姿は、山の学校で子供たちがこの一年で得てきたものを何よりも象徴しているように感じています。

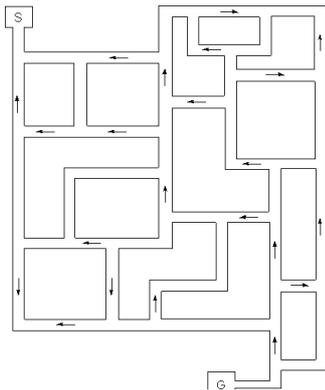
さて、この冬学期にまず取り組んだのは、足し算や引き算の練習をなるべく楽しくなる工夫を加えて続けていくことでした。足し算や引き算も、最初はひとけたの数の簡単なものから始めましたが、徐々に大きな数にも挑戦してもらうことにしました。大きな数の足し算・引き算の仕組みや考え方の手順についての解説を聞き、それから実際に手を動かして計算の練習を行なうようにしました。こうした計算の練習は、慣れるまではとても面倒だし退屈なものかもしれませんが、そうした地道な努力を経てこそ、もっと複雑な計算のための下地もできあがるため、たいへん重要です。授業では、この重要な取り組みをできるだけ楽しみながら進めていくために、いくつかのパズル形式のものにも挑戦してもらいました。4×4、5×5のマスマの左下四つに数字を書き、それをどんどんと右に、上にと足しながら進んでいきます。最初は小さな数字なので計算も簡単ですが、徐々に大きな数になってくるので、計算も大変になっていきます。ひとつの間違いがその後にも影響してくるので気が抜けません。ひとつの間違いを見つけたら、そこから遡って自分がどこで間違えたかを見つけることも大事なことです。

また、日ごろから行える計算トレーニングのヒントのために、車のナンバープレートを使って足し算の練習を行なうことも試みました。いくつかのナンバープレートの数字をそれぞれ足し合わせて、一番大きな数字を見つけるという一種のゲームです。授業では、最初は架空のナンバープレートを使って計算を行ないましたが、その後は、自分の覚えているナンバープレートの数字を言ってもらい、それを使って問題をその場で作りました。ふと見渡してみると、生活の中にはたくさん数字がちりばめられています。郵便番号や番地、電話番号など、色んな数字が身近なところにあります。こうしたもので遊ぶような感覚で日ごろから計算の練習を行なってもらうことで、「かず」によりよく馴染んでほしいと思います。

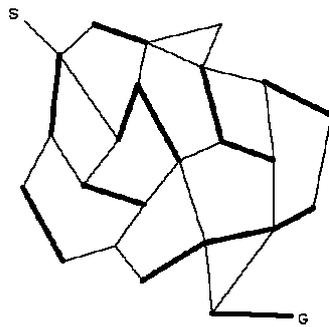
こうした課題に取り組む子供たちは、意外なほどに楽しそうです。山の学校で子供たちを見ながら私が毎回感じるのは、子供たちが本当に色々な問題に挑戦してみたい、解いてみたいと好奇心たっぷりに臨んでいるということです。もちろん、課題によっては色々好き嫌いもあるようですが、それでも、何か手掛かりを手にしたとたんに、溜まっていた水が堰をきって流れ出すように、勉強に集中する子もいます。あるいは与えられた課題を自分の工夫で、もっと面白く、楽しく変えてしまうような子たちもいます。そこには何か生き生きとした「勉強」のあり方が感じられます。ひょっとすると勉強の楽しさは、本人たちが一番よくわかっているのだろうという気がしていますが、こちらもそのワクワクした思いに応え、その情熱をさらに引き出し、広げてあげたく思っています。二年生になると、また少し手ごわい問題と出会うことでしょうが、ワクワクする気持ちを忘れずに、楽しみながら「かず」で遊んでもらいたいと思います。

(文責 上尾真道)

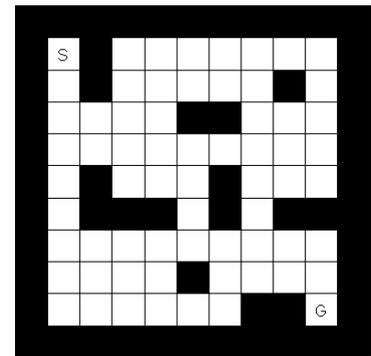
学校で習うことが増えてきたことと合わせて、いよいよ、足し算・引き算など計算を使ったパズルをするようになりました。その分、春学期から取り組んできた、数を使わずに考える純粋思考（一筆書きなど）の問題からは少し離れるようになってきましたが、それでも「考えること」自体からの発展で、冬学期には、『考える迷路』というものを登場させました。これまで「できる！」と思っていた生徒でも、その迷路にはなかなか歯ごたえがあります。ですがこちらの期待した通り、それをクリアすることで、ますます自信をつけてくれているように思うこの頃です。



一方通行迷路



細線→細線→太線でたどる迷路



全箇所1回ずつ通る迷路

中にはさらに弾みをつけて、家で自分の買ってもらった迷路のドリルを持ってきて、みんなにでももらいたいと申し出る生徒も出てきました。その時は喜んでそれを使わせてもらっています。

『間違い探し』の方も、ちょっとずつ難易度を上げながら取り組んでもらっています。最後の一箇所を見つけるのがやはり粘り強さの見せ所です。それを、授業中には見つけられなかったけれども、来週になると、決まって「あの問題、簡単やった！」と言って、答を見せにきてくれます。きっとお家で一緒に考えてもらったのでしょう。それも算数に対する好印象につながると思います。

計算では、 $\square + 3 = 10$ といった、かっこの問題を出しました。難しいかと思いきや、得意そうに解いているので、今度は $\square + \square = 12$ など、 \square に同じ数が入るという条件で出したところ、これはちょっと歯ごたえがあって、5 を当てはめ、6 を当てはめの代入法で解いていました。できるとまた「もっとないの？」と言うので、「じゃあ、スペシャル問題！」と銘打って、 $\square + \square + \square = 15$ といったレベルのものを出しました。それでも嬉々として解いてくれたので、今度は「すごいなあ」と言って花を持たせました。

今年から1年生のうちは、個人用のドリルも配らず、従って宿題もほとんど指定しませんでした。それは好奇心の観点から、あまり予習に走らず、十分な助走を持って復習した方が良く考えたからです。

2年生からはいよいよそのドリル（計算・文章題）と、パズルといった、2本立てで取り組んでいきます。好奇心旺盛な君たちには「大丈夫」の太鼓判を押します。これからも考えることに自信を持って、楽しくかずの学習に取り組んで下さい。

(文責 福西亮馬)

このクラスでは、秋学期の終わりごろから、授業の前半にドリルで復習に徹するのと並行して、授業の後半では「工作」に取り組んできました。

小学2年生の算数では、たし算とひき算、かけ算のほかに、「時計」や「長さ (cm, mm)」、「図形」といった概念を学びます。とくに「長さ」については、みんながみんなそうだとは言えませんが、定規で測ったり、線を引いたりすることに自信がない生徒がほとんどでした。ましてや、センチメートル (cm) やミリメートル (mm) といった「単位」を扱うことは、彼らにとっては初めての経験です。また、定規の目盛りを読むことは、1年生で学んだ「数直線」の応用でもあります。そもそもその数直線の読みとり不安のある生徒もいました。

おそらく不慣れなだけなのです。たし算やひき算、かけ算といった計算問題に比べ、問題に接する機会が圧倒的に少ないのです。ドリルで計算問題を繰り返して自信をつけていくのと同じように、「長さ」についても、どこかで繰り返して経験して体得することが必要なのです。もちろんドリルにも「長さ」を扱うページが時々あらわれますが、彼らが自信をつけるには絶対的に不足しているように思われました。

そう思っていたころ、ちょうど、クラスの間の休み時間には、福西先生が用意して下さるペーパークラフトの飛行機を熱心にする子どもたちの姿がありました。私も経験がありますが、自分の手でなにかを作る（創る）ことは、既製品を与えられることとはまた違った喜びがあります。また、保護者の方からも貴重なご助言をいただきました。それで、「長さ」や「図形」を積極的に学んでいくためには「工作」がうってつけだと考えました。

はじめの数回は、サイコロを作りました。「角度」は未習得なので、六面体のときは通常の方眼紙を、四面体や八面体などのサイコロにチャレンジするときは正三角形の格子の方眼紙を用意し、展開図から描いてもらいました。最初は、定規に沿って線を引けなかったり、目盛りを読めなかったり、あるいは四角形や三角形を描けなかったりと、なかなかうまくいきません。しかし彼らには「サイコロを作りたい!」という意欲が強く、努力を惜しまず頑張ってくれていました。目的を、「目盛りを読むこと」ではなく「サイコロを作ること」に据えると、彼らはとても生き活きと「1、2、3…」と目盛りを数えてくれています。

「長さ」や「図形」を扱うことに徐々に慣れてくると、生徒たちはサイコロの一边の長さを変えたり、様々な大きさや形のサイコロを揃えたり、家でも作ってきてくれたりと、さまざまに自発的に取り組みを展開してくれました。あるときは、袋にいっぱいサイコロを持ってきてくれた生徒もいました。

サイコロ作りに数回取り組んだ後、次のステップとして正多面体ではない立体作りに取り組みはじめました。毎回、「パトカー」や「トラック」といった車を作ることを目的に据えて、寸法を実寸より縮小して記した見本のプリントをお渡しして、方眼紙に展開図を描いてもらいます。正多面体だと、長さを変えさえすれば、それぞれの辺をすべて切りのいいセンチメートル単位に合わせることも可能でしたが、直方体の端を斜めの面でカットした七面体などでは、それもできません。自分で大きさを変える自由はなくなってしまいますが、その代わりにミリメートルの測定に慣れることができます。また、正確に測定しないと展開図が閉じず、車も完成しないため、自然と丁寧な測定を心掛けるようになります。

ときには一つの車を完成させるのに数週間かかることもあります。しかしこうしてたった一枚の紙から、自分の力で定規と鉛筆だけを使って一つの車を完成させたときには、喜びもひとしおだと思えます。最初は目盛りを読めず、線を引けなかった生徒が、あるとき突然「わかったような気がする」と言ってコツを体得して、今となっては休み時間返上で熱心に線を引いている姿を見ると、なんだか胸に迫るものがあります。そんな彼／彼女が、毎回のクラスで「家で作ってきた!」と言って見せてくれる宝物は、積極的な学びの証であり、これまでの努力の結晶です。

(文責 高木 彬)

このクラスの目的は、以前の山びこ通信やブログでも触れていますが、子どもたちに「かず」に興味をもってもらう、論理的に考えてもらう、そして何よりもあきらめずに取り組んでもらう、の3点です。この目的の下、冬学期もパズルと算数の問題の二本立てで「かず」に取り組んできました。

算数の問題としては、「下一桁が0の数が含まれるかけ算・わり算」、「立体」、今まで勉強した分野の「文章題」を行いました。「立体」については後で触れますので、まずは「かけ算・わり算」、「文章題」についてです。「下一桁が0の数が含まれるかけ算・わり算」ではかずに10倍・100倍、 $1/10$ ・ $1/100$ するとどう変化するかが主な内容ですが、それ以上に「かけ算とわり算の関係」に重点を置きました。つまりかけ算はわり算の逆、例えば $15 \times 3 = 45 \Leftrightarrow 45 \div 3 = 15$ というような書き換えができることを意識してもらおうということです。これは分数や中学数学の方程式でも基本となりますが、無意識に理解していても、小学生が問題を解く際にそれを自覚的に使うことはそれほどないようです。そこで、このクラスではかけ算とわり算の逆の関係を使って、「確かめの計算」や「 $1/10$ は10倍の反対」という小学生のよく使う問題で実践しました。「文章題」でも、かけ算やわり算の問題を中心に、そうした要素に取り組みました。特に「確かめの計算」は子どもたちが面倒がるもので、結局完璧な定着までは至っていませんが、できるだけやってもらいました。

「文章題」では上記の点以上に、四則のどれを使うのが重要です。子どもたちは分からない時、式を立てる段階で不安そうに「これでいい？」とよく尋ねます。私は「とりあえず答えまで出してみよう。」とよく答えます。というのも、答えを出し、それからもう一度問題を読んでそれが妥当かどうか自分で確かめるという作業をして欲しいからです。もし「150人を10グループに分ける」という問題でかけ算を用いたら「1グループ1500人」という答えが出ます。しかしこれは元的人数よりも多くなってしまいますから、問題を読み直せば明らかに間違いだと分かるはずですが、こうした作業を繰り返していくことで、次第に四則を使い分けることに慣れるでしょう。

また今学期は「立体作り」を2回おこないました。これは高木先生のクラスでの取り組みを見た子どもたちが、自発的に要望してくれたものです。高木先生のクラスは主に直線や三角形、四角形に馴染むことが主目的ですが、小学3・4年生では、立体自体を学習するための導入として取り組みました。ただ何よりも、いつもと違う取り組みは子どもたちにも好評でした。これからもこのような取り組みを適宜挿入してみようと思います。

一方、パズルは大きく2種類ありました。1つは秋学期から続けている「イラストロジック」です。これはいくつかのパターンから矛盾がないようにマスを埋めていくパズルなので、論理的に考える必要があります。そのためか、最初は難しいとの声も聞かれましたが、今では 10×10 程度の易しい問題ならスラスラ解けるようになりました。今学期には特に、私が出したヒントから、自ら考え、応用させて問題を解いていく姿が多く見かけられました。この少しずつの進歩が非常に頼もしく感じます。

もう1つのパズルは迷路です。といっても普通の迷路ではなく、一定の規則に従わなければならない特殊な迷路です。例えば矢印の方向にのみ進めるものや、規定の回数曲がらなければならないものなどがありました。難易度の高いものも多く、時には解けない子もいました。そういう時はヒントを出し、何とか自分で考えてもらうようにしています。やはり自ら一定の時間考えるという習慣は大事です。これはパズルだけではなく、あらゆる勉強に通ずることでしょう。今後も「かず」を通して、学びの醍醐味を味わってもらえるクラスを目指していきますので、よろしく願います。

(文責 岸本廣大)

をときほぐすことのできる教材としては面白いものです。こういった遊びの中にある偶然から「なぜ？」と考えるようになって、算数を好きになってもらう一助になればと願っています。



『ペントミノ』

また最後に、もし時間があれば、『推理クイズ』をしています。これは、ことば1年生の項を見ていただいただけとお判りになると思いますが、「前提を疑うこと」と、何より「ヒントは自分で見つけ出すこと」という姿勢が育ちます。それは文章題でも、自分流に早合点して解決せず、何度も問題をよく読んでその中にあるヒントを探すとまったくの平行です。つまり、「先生ヒントちょうだい！」とねだるのではなく、自分で物事を解決する癖をつけてほしいと思うからです。ますますの成長を期待しています。

(文責 福西亮馬)

『かず』 5・6年生 担当 福西亮馬

「もっと帰納を！」

このクラスでは、高学年に相応しく「論理的に考えること」を中心に取り組んでいます。

『論理的思考』が大事であることは昔から言われていますが、なかなか「そうは言っても」ということで、目先の課題が優先され後回しにされがちです。そうした後回しなものほど、実は他の二倍は取り組まないと帳尻を合わせることができないのですが、それを実践する人は限られてきます。

さて、学校ですることは主に「知っている事実」を当てはめながら理解するという演繹の作業です。なぜそれを身につける必要があるかと言えば、当然それは「知らない事実」に出会った時に道具として役立つからです。一方、その知っている事実から「知らない事実」にアプローチする作業が帰納です。

たとえば、教科書に書いてある「奇数+奇数=偶数」という定理を、練習問題で $1+3=4$ 、 $1+5=6$ …と様々な計算にあてはめ確かめることが演繹にあたります。反対に、 $1+3=4$ 、 $1+5=6$ …と延々と計算を続けた結果、「(おそらく) 奇数+奇数=偶数 (であろう)」という定理を得ること、これが帰納です。

こうして見ると、帰納の方がひょっとして無限回の作業を必要とする分、あまりにも泥臭い作業で、「奇数+奇数=偶数」とあらかじめ知っておいた方が賢いのではないかと思えるかもしれません。しかしいつの時代でも、知識の広がる方向を担ってきたのは演繹ではなく、やはり泥臭い帰納でした。「それでも地球は回っている」の話もそうですが、演繹に頼るだけでは、既成の枠の中から抜け出すことはできず、逆にあらゆることがもうすっかり解明されてしまっているのだという誤解を生じてしまいます。そして自分で解決しようとする力も身につかなくなってしまいます。

また逆に帰納に偏りすぎても、自分だけの理論を作り上げてしまう弊害はもちろんあります。そこで出番となるのが論理的思考です。仮定を置き、それに矛盾するかしらないかによって、一見複雑に見えた物事を確実に整理していくことが大事になります。

そこでこのクラスでは、『論理パズル』と、ごく初歩的な『数論』とに取り組んでいます。前者は純粹に論理的思考のためで、後者は帰納をもっと経験するためです。前号では『論理パズル』について書きましたので、今回は『数論』の方に触れてみたいと思います。

数論では、主に場合分けについて考察します。たとえば、次のような問題を考えます。

問題 4個の色の違う箱に、それぞれ1~4をかいた4個の玉の入れ方は何パターンあるか？

ここで大事なのは、すぐに答を知ろうとすることではなく、実際に手を動かして確かめてみることで、箱が1つの時は当然1パターンです(しかし「本当に？」と疑問を投げかけてみたところ、「はい！」と「ちょっと待って！」の二種類の反応がありました)。2箱の時は2パターンです。ここで重要なのは、当たり前に見える作業でも、とことん続けることです。実際3箱の時は、3パターンではなく、6パターンで、この辺りから当たり前ではなくなってきます。

この後、「教え過ぎず、教え忘れず」しらみ潰しに数え上げると、相当な骨折り仕事になります。それでも試行錯誤の結果、箱が4つの時も同様に、それぞれの生徒が24パターンという「自分の答」にたどりつくことができました(この試行錯誤を恐れることは、ことば1年の項で述べた『推理クイズ』において、一度で答を言い当てようとする態度に似ています)。また、少し早くできた生徒には、箱を5

個にして考えてもらいました。そうすると人間の頭というものは不思議なもので、何とか楽をしようとして、ある法則性に気付きます。これが帰納の大事な所です。5箱の場合も考えられた生徒には、次に「2年生に説明できるように」という課題を与えました。人に説明できれば本当に理解していると言えるからです。

そのうちに他の生徒たちもそのことに気付き出して、全員でそれを「どうやって説明するか」を一緒に考えてもらうことになりました。そこでさらに意見交換するうちに、「あれ？」と互いに自分の考えに「穴」が見つかったり、「いや、ちょっと待って…あ、そっか、なるほど！」と、より理解を深める様子が見られました。そして「先生、もう O.K.！」と自信満々に宣言し、白板を使って以下のように説明してくれました。

(生徒全員の説明)

「まず、箱が1つの時は1パターンです。2箱の時は2パターン。3箱の時は、数えた結果、6パターンだと分かります。そこで問題の4箱の時は、同様に3つの玉だけを考えると、それがさっきの6パターンだということが利用できて、残り1個の玉の選び方には4パターンあるから、 $4 \times 6 = 24$ パターンと計算できます！同様に、5箱の時は、まず4つの玉だけを考えると、それが24パターンだったから、残り1個の玉の選び方に5パターンあるから、 5×24 で120パターン…と、繰り返していくことで分かります！

生徒たちの表情には、あくまで帰納的に考えた「結果」、後は論理の力を使って、数え上げなくても答が導き出せることへの、勝ち誇った様子がうかがえました。実際、生徒たちの発表は百点満点の枠を飛び越えた素晴らしいものに思えました（実を言うと、私も別の説明法を持っていたのですが、ここではただ頷いて聞いていました）。

算数は、自分で考えることと論理的・帰納的な冒険があってこそ楽しめるものです。このクラスでの経験を最後のお土産として中学に持って行ってほしいと願っています。中学に上がれば、より多くの教科書の知識に対してバランスを保つために、より一層その力が必要となって来るはずですが、そして実社会に出れば、未知の問題を解決するために、それまで培った論理的思考力は頼もしい武器となるでしょう。これからもどうか磨きをかけてほしいと思います。

(文責 福西亮馬)

『かず』 3～6年生 担当 福西亮馬

このクラスでは、学年を問わず、生徒一人一人に合った総復習を進めています。仮に何年生であっても自信を取り戻すために、積極的に1年生のドリルからしています。

一般に算数ほど苦手意識の生まれやすい科目はありません。それは自分の本当の状況と、現在の授業（とテスト）とのギャップによります。なぜなら、算数は積み重ねなので、下から順番に積まない限り、どんなに上の方から上手に積もうとしても、実質それは「積まれていない」ことになるからです。従って、どんなに今習っていることが緊急を要しても、明日それが試験に出るからと言っても、それよりもっと前の部分から、自分が本当に分かっている部分の「すぐ次」から始めない限り、ほとんどそれ以外に費やした勉強時間は、心理的なギャップ（つまり苦手意識）の積み重ねに終わってしまうケースがほとんどだと言えます。

ですから今の学年にとらわれず、仮に6年生でも実際の自分の力が4年生であれば、4年生のことから始めるに越したことはありません。それには今習っていることをしようとするよりも勇気がいります。もっと前からするならばもっと勇気が必要です。ですがそれが苦手科目を克服する一番の近道なのです。その時間が「人にやらされている」のではなく、「自分が進んでしている」ものであるならば、決して後ろ向きなことはありません。

繰り返しになりますが、算数は積み重ねの科目です。だからこそ本当に下から順に積んだものであれば、それは揺るぎないものになるはずですが、その土台を作るお手伝いを、このクラスではしたいと考えています。

「今なら分かる」という貯金をしたい人、自分の復習ポイントがどこからかを知りたい人は、ぜひこのクラスに参加して下さい。

(文責 福西亮馬)

このクラスは冬学期の後半から新しく開かれ、中学校入学を控えた子どもさんと、英語の勉強の「準備」を大きな目標としたクラスです。近年は小学校でも英語を教えることは多いですが、あくまで外国語によるコミュニケーションに触れる事が第一の目的になっていると思います。それ自体は決して悪いことではありませんが、中学校の英語は科目の1つとしての「勉強」という一面が強いです。そのような小学校と中学校のギャップを踏まえて、このクラスでは小中の橋渡し役となり、違和感なく中学校で英語の勉強に取り組めるように進めてきました。

計6回と短い期間でしたが、それ故に目標をもって集中的に取り組めたと思います。その目標とは、「アルファベットを綺麗に読み書きする」、「英語で自己紹介をする」の2点で、初回のクラスで子どもさんと決めました。その目標の背景は、外国語を聴き、読み、書き、話すという4側面を駆使して英語に慣れ親しんでもらうことでした。外国語の習得とはその4側面の習得であり、またそれらが相互に関連しながら学んでいくことなのです。例えば、最初のアルファベットの学習も、まずCDでアルファベットの発音を聴き、一緒に口に出して確認してから、今度は発音しながらノートに書き取るという流れでした。アルファベットなら小学生でも、聞いたり発音したりできるでしょう。しかし、中学校では更に読み、書くという作業が追加されます。ただそれらを別々に学ぶのではなく、既にある発音の知識とそれを読み、書くという作業を組み合わせるということが大事です。上記はそうした取り組みの1つでした。幸いなことに、子どもさんは英語に興味を持ち、発音しながら書く練習をたくさんこなして、すぐにアルファベットを綺麗に読み書きできるようになりました。

更にこうした外国語の4側面を駆使した取り組みとして、簡単な英単語や英語の挨拶に触れるという実践も行いました。例えばイラストを見ながら“girl”や“Good morning.”といった単語や挨拶をCDから聴き、それに沿ってテキストの単語を読み、発音し、ノートに書き取っていきます。ここでは、一連の4側面からの実践以外にも、日本語化した英語と実際の英語との違いに気づいてもらえるようにしました。例えばブログにも挙げたような“guitar”や“radio”はその典型でしょう。子どもさんは最初、頭の上に「？」が浮かんでいましたが、まずはそう疑うことが大事です。それを理解して更に外国語に一步近づけるのです。

もう1つの目標である「英語で自己紹介」は英語を書き、話すことに重点をおいていますが、これも外国語の4側面を駆使した取り組みです。内容として「名前」、「出身・住所」、「年齢・学年」、「好きなこと」、「特技」といったものを発表することになりました。それらの英語での表現の仕方を、私が提示して、それを用いて自己紹介文を作っていきます。その過程でも、その表現を発音しながら書き取ることに重点を置きました。更に、それらを尋ねる英文も一緒に学び、私との会話を行うという実践も行ってきました。いきなり「英語で答えて」と言われ、子どもさんは面食らったようでしたが、まずはやってみることが大事ですね。すぐに馴染んでくれました。またこれを通して、英文の決まり、例えばピリオドやコンマの存在も適宜勉強しました。このクラス便り執筆時点では自己紹介文は未完成ですが、最終的にそれを自ら書き、発表する、そして私と初対面と言う設定で会話してみることによって英語の「勉強」にゆっくりと入っていけるでしょう。

以上のように、英語を学ぶ「準備」として読む・聴く・書く・話すの4側面を中心として学べるように取り組んできました。ただ何よりも重要なのは、楽しく取り組むことです。このクラスではなるだけイラストやCD、ゲーム性を取り入れましたが、それが小中の英語のいわば緩衝材になってくれると思います。

(文責 岸本廣大)

『日本語の読み書き』中1～3年生 担当 岸本廣大^{こうた}

冬学期は、秋学期から読み進めてきた梅棹忠夫氏の『実戦・世界言語紀行』を読了しました。秋学期に読了した『歴史小品』に続いて、この一年で2冊の本を読み終えたこととなります。新書ではありませんが、筆者のフィールドワークを通じた世界中の言語と民俗について書かれたこのテキストは、中学生にとって決して易しいものではなかったと思います。しかし内容が難しいからこそ、それを一生懸命読んで、内容を自分で消化し、考えて意見を述べるという一連の作業を一年間やってきたことは、生徒さんの「ことば」の力になったと思います。例えば、最初の頃は、内容に対する自分の意見とその理由、内容についての感想を書いてもらう宿題で、それらの文が無機的に淡々と並べられていたものが、最後にはそれらが文章としてしっかりと整理され、有機的に連なった文章となっていました。

また冬学期からはしっかりと読み取りを行うために、段落の要約にも取り組んできました。読んできたテキストの範囲から2ページ程度の段落を選んで100字程度にまとめるのですが、これが意外に難しいものです。特に論説文では筆者が言いたいことを選別することが重要です。この点で生徒さんは、読み取りがしっかりできるようにもなったと思います。それは次の例からも分かるでしょう。テキストで、著者が日本語のローマ字化推進を主張する理由として、外国との交流の容易化を挙げていました。それに対して、文化交流という側面に着目すれば、日本語のローマ字化はその文化の土台を失うことになり本末転倒だ、と巧みに著者に対する批判を展開しました。これはテキストの内容をしっかりと読み取った結果でしょう。

このような取り組みを通して表現についても勉強していきました。主として口語的な表現をできるだけ避けて、なるべく誰にとっても読みやすい文章を作れるように意識してもらったのです。「～って思いました。」を「～と思います。」と改めるような一見当然な表現も、まずは意識してそれを表現することが「ことば」を自分のものにしていく第一歩です。

そして冬学期の後半は、一年の総決算としてこれまで読んできた本の感想・意見文を書いてきました。作文を苦手とする子どもは多いと思われそうですが、それは何を書いたらいいのかわからないという全体の見通しがわからないからでしょう。そこでクラスでは、まず作文の書き方から勉強していきました。つまり、作文の設計図を書くことです。詳細はブログを参照していただきたいのですが、これによって常に作文の全体図、自分の主張が明確になり、見通しがつくのです。実はこの原稿を書いている時点でまだ完成してはいませんが、設計図を見る限り、良いものができるかと非常に期待しています。

今学期は、「まずは書いてみる」を実践した学期でした。一年を通してそのような傾向はありましたが、特に今学期は、これまで続けてきた内容に対する意見・感想を「書く」事に加え、要約を「書く」、作文を「書く」などまず実践してみる場面が多くありました。書くことのメリットとして、まず自分の頭の中が整理される点があります。作文の設計図を書く際にも、生徒さんが出した考えと考えがどのようにリンクしているのか、書いてみて初めて分かる場面も見られました。そして何よりも、書く事は常に「ことば」に接することになります。つまり書くことで「この漢字はどうやって書くのだろうか？」といった素朴な疑問から「この考えや気持ちをもっと正確に表現するにはどういう言葉があるだろうか？」といったややこだわりを持った疑問が沸きます。それを新たに理解していくことは「ことば」を自分のものにしていくことにつながります。面白いことにそれはテキストのいう「実戦」と通ずるところがあります。その意味でこのクラスも『実戦・「私のことば」紀行』だったのではないのでしょうか。

(文責 岸本廣大)



日本語の読み書き

毎授業、テキストを少しずつ読破しながら、それに基づいた作文、小論文、討論を行っています。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今も、そして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！

冬学期は、秋学期から続けているリスニングと文法の解説・演習に加え、新たに単語の確認を導入し、これらを三本柱としてクラスが展開していきました。

まず新しく取り入れた単語の確認ですが、これは事前に一定数の単語について、発音や綴りを中心に生徒さんと一緒に確認し、翌週にそれらの確認のため一種のテストを行うというものです。ここで重要なのは、単語を定着させることです。結果の良し悪しではなく、間違った単語を次回には覚えなおしてくるという姿勢を作ってもらおうと意図して、前の週に提示した新たな単語の確認だけではなく、先週間違えた単語も復習するという形式でもう一度出題し確認しています。これを繰り返すことで、最終的に今学期で100近い単語を覚えていきました。またこの取り組みでは、家庭での復習も重要になります。単語の確認はそれを促進する機能も期待できるのです。実際生徒さんは、最初の頃何度も同じ単語を間違えていましたが、次第にそのような単語から覚えて正解するようになっていきました。

続いて秋学期から続けてきたリスニングです。これは従来と同様に、特に最近勉強した文法事項に沿った内容の英文を毎回聴いてもらいました。同時に書き取りも行って、文法を理解を重視することも従来と同じです。ただ冬学期は、それ以外にも曜日や日付、天気や時刻を尋ねる英文も聴いてもらいました。これらは日常的な表現のため、よく用いられるもので、こうしたものも聴き取って理解できるように取り組んできました。生徒さんは学校でもよく英語を聴いているのか、英文の意味は良く聞き取れていました。それを書き取るのは更に難しいもので、ミスも良くありましたが、文法的な知識を用いて、複数形や三人称単数の-sをつけたり、冠詞のaやanなどを挿入したりしている点に、文法の知識とリスニングの聴き取りを両方活用しているところが見て取れました。このようなハイブリッドな英語の勉強は効果的です。

今学期の文法の内容は、主として所有格、一般動詞、whoやwhose、can、現在進行形、過去形など多岐に渡りました。ただしここで重要なのは、それらは決して全く新しいものではなく、今まで習った英文法を生かせば、より簡単に理解できる部分も多々あるということです。例えば一般動詞の否定文や疑問文はdon'tやdoを用いますが、これはdoがbe動詞と同じ扱いだと気づけば、その理解はよりスムーズになるでしょう。これはcanや現在進行形にも当てはまります。このような英語の原則の理解は、ただ暗記するよりも、自分で考える分、一層の定着が期待できます。一方で、新たに覚えるべき分野があるのも事実です。例えば代名詞やその複数形、所有格は、日本語には無い概念であり、一から覚えねばなりません。こうした分野は演習による復習が大事です。そのため今学期は、これまで以上に多くのプリントで英文法の演習を行いました。特に人称代名詞の複数形と所有格、一般動詞の三人称単数形に重点を置きました。人称代名詞は英語の基本であり、その理解はこれから英語を勉強していくのに不可欠です。三人称単数形はよく見落とされがちですが、主語の把握ができていないかどうかを示す点で重要な文法事項です。またこれを自覚することで英文を意識的に読む習慣がつかます。こうした重要な意味もあり、それらを何度も復習してもらい、演習でもその点に注意を払って採点・解説をしました。生徒さんも最初は、何が間違っているのか自体が分からない様子でしたが、最終的に間違いを指摘するとその理由に気づくほどになりました。今後は、それを意識して間違わないようにする段階へとステップアップしてもらいたいです。

このクラスの英語は、やや地味な感を与えますが、それでも辞書を引くことをはじめ、確認、復習といった重要な取り組みを重視しています。これからも少しずつでも英語を理解していけるよう、中1の大事な英語のクラスに取り組んでいきます。

(文責 岸本廣大)

『英語の基本』 中2～3年生 担当 浅野直樹

こちらのクラスはすでにある程度英語を勉強した人を対象にしています。初めて英語に触れるときのことは岸本先生のクラスを参照していただくとして、ここでは中級レベルのときの話をします。英検なら4級から2級くらいまで、学年でいうと中学2、3年生から高校3年生くらいまでとっていただければ想像がつくでしょう。

一口に中級といっても関係代名詞を何とか理解できるといった段階から、大学入試に出題されるような英文を読めるような段階まで含まれます。このクラスの生徒たちも段階がまちまちで、個別に対応しているのですが、それでもやっていることは本質的に同じです。

まずは英語に特有な表現や構造を把握することです。授業中に受ける質問はほとんどがその点に関するものです。説明と理解のためにはS(主語)、V(動詞)、O(目的語)、C(補語)や使役動詞といった文法用語が役に立ちます。よく質問されるのは、例えば”The book made me sad.”といった文で、本来はかなり簡単な英文のはずですが、日本語を話す人にとっては苦勞します。これはS+V+O+Cの文であり、特にmake+O+Cで「OをCの状態にする」という意味になると説明するとすっきりします。

文法はわかるけれども長文を読むのが苦しいということもあります。その原因は多くの場合、語彙の不足にあります。辞書を引けば何とでもなると考えるのは間違いです。ほとんどの語には複数の意味があるのでどれを採用したらよいか迷いますし、何より文章を読みながらしょっちゅう辞書を引かなければならないとなるとストレスがたまります。ですので、出会った未知の単語を書き出して覚えるなり、市販の単語集を利用するなりして、なるべく多くの語彙を身につけることが切に望まれます。

あるときは文法に集中して取り組み、また別のときは語彙に焦点を当て、そうして気づくと今まで読めなかった英文が読めるようになっていく——これは日頃から地道に頑張った人にしか味わえない喜びです。

(文責 浅野直樹)

タックス ～英語の語源・こぼれ話～ 『税とタクシー』

「税」を意味する英語にタックス (tax) という語がある。これは、「触れる」という意味のラテン語 tango (タンゴ) に由来する。この tango から「評価する」という意味の taxo (タクソー) というラテン語ができ、そこから tax という英語ができた、という次第。自分の手で「触れること」は何かを「評価すること」につながる。たとえば、tangible (触れることのできる) という英語も tango に由来するが、tangible assets とはいえ「有形資産」と訳す。日本語では「形のある資産」となるが、英語の発想では「形があって触れる (=評価する) ことのできる資産」という意味になる。

ところで、私たちが日常利用する交通機関の一つ、タクシー (taxi) も税金 (tax) と語源は同じである。種明かしをすると、taxi は taximeter cab の略語であり、taximeter とは「料金メーター」を意味している。つまり、taxi とは料金を「評価する (taxo)」メーターを備えた車という意味で、元のラテン語のニュアンスを今も受け継いでいることになる。

一方、数学でタンジェント (tangent) とはいえ、幾何学 (geometry) では「接線」を、三角関数では「正接」を意味する。この言葉は、ラテン語 tango の現在分詞 (tangens) からできた語で、「接触している」という意味をもつ。

さらに細かく見ていくと、ラテン語 tango (触れる) の完了分詞の形は tactum で、英単語 tact の語源となっている。tact は、「美的センス」や「機転」などの意味を持つが、基本的意味は「触覚、感覚」ということになり、元のラテン語の「触れる」というニュアンスが今も生きている。

日本語の日常会話でも「だれだれとコンタクトをとる」と言うが、コンタクト (contact) とは「接触、交際」を意味する英語であり、これもラテン語 tango がルーツということになる。tact にちなんだ英単語としては、contagion (影響、病気の伝染) がある。

「味見」を意味する taste (テイスト) もラテン語の tango (触れる) が語源である。元々は「(食事や飲み物に) 舌で触れる」というニュアンスがあったのだろう。蛇足ながら taste という英単語はことわざと縁が深い。名詞として「好み」を意味した場合、There is no accounting for tastes. (たで食う虫も好き好き) というのがある。Tastes differ. (好みは人によって違う) という意味である。また、自動詞として「味がする」という意味で使われた場合、Good medicine tastes bitter. (良薬口に苦し) ということわざもある。

(文責 山下太郎)

この冬学期は生徒たちの数学的センスを感じた場面が多々あったのでそれらを紹介します。クラスの様子が伝わるとともに、数学に取り組む際のヒントになればと思います。

<その1> 「三角比の計算手順はわかるのですが、意味がわかりません。」

これは本質的な問いですね。直角三角形では任意の二辺の長さを定めれば三角形が一つに決まり（斜辺と他の一辺相当あるいは二辺夾角相当で合同になる）、二辺の比を定めれば形が一つに決まり、またその逆も成り立つので、直角三角形の二辺の比と、直角以外の角度とは一対一対応であるというのが出発点です。実生活においては、角度がわかれば長さがわかり、その逆に長さがわかれば角度がわかったりするので測量などで使うことができます。

<その2> 「三角比の理屈はわかるのですが、図を描くのが難しかったり、計算ができなかったりします。」

これだけはっきりと自分の課題を把握しているところに数学的のなを感じます。三角比では図をいかに描くと直感的にだまされたりします。もちろん数学的にはどんなに小さい角度でも、そこに 60° と書き込めば 60° ということになるのですが。また、特に \tan （正接）では二重分数の計算や有理化の作業もしばしば必要となるので計算力も欠かせません。

<その3> 「不等式の証明で自分のやり方ではダメですか？相加相乗平均の説明はわかるのですが、いつ使えばよいかわかりません。」

証明は筋さえ通っていればどんなやり方でもいいです。相加相乗平均はかけ合わせると簡単な形になる2数があるときには有効です。例えば、「 $a > 0$ のとき、 $a + \frac{1}{a} \geq 2$ を証明せよ」という問題があったとすると、相加相乗平均の関係より $a + \frac{1}{a} \geq 2\sqrt{a \times \frac{1}{a}} = 2$ 、と書けばよいわけです。この問題も強引に、(左辺) - (右辺) = $a + \frac{1}{a} - 2 = \sqrt{a^2} - 2\sqrt{a} \sqrt{\frac{1}{a}} + \sqrt{\frac{1}{a^2}} = (\sqrt{a} - \sqrt{\frac{1}{a}})^2 \geq 0$ と証明してもよいわけです。

こうした本質的な問いこそが数学のおもしろさであり、また難しさでもあります。

(文責 浅野直樹)

『ウェブ・プログラミング入門』 (高校・一般クラス)

```

index.cgi
push( @items, new Link( $user->name(), list_url() );
push( @items, {
  new Link( Word->new( "Option", mode_url( "option" ) ),
  new Link( Word->new( "Logout", logout_url() ),
});
} else {
push( @items, Word->new( "User" );
push( @items, {
  new Link( Word->new( "Login", login_url() ),
  new Link( Word->new( "Register", register_url() ),
});
}

# RSS
push( @items, Word->new( "RSS" );
my( @rss ) = ( new Link( Word->new( "LoungeRSS", rss_url( "lounge" ) ) );

my( $menu_mode, $menu_id ) = @_;
if ( $menu_mode eq "category" ) {
push( @rss, new Link( Word->new( "CategoryRSS", rss_url( "category", $menu_id ) ) );
} else {
use Topic;
my( $category_id ) = Topic->topic( $menu_id )->category_id();
push( @rss,
  new Link( Word->new( "CategoryRSS", rss_url( "category",
$category_id ),
  new Link( Word->new( "TopicRSS", rss_url( "topic", $menu_id ),
));
});
push( @items, \@rss );

# Search Form
my( $search_title ) = Word->new( "Search" );
my( $search_word ) = utf8( $q->param( "find" ) ) || Word->new( "Search" );
push( @items, { STRING => $search_title, HTML => search_form_url() );
push( @items, $search_title );
my( $checked ) = "

```

現在、多くの人インターネットを利用している。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合もある。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用している人は全体のごく一部でしかない。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いない。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができる。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ね XHTML と CGI (Perl) を扱う予定です。XHTML は、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGI は、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。この他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

『古文講読』

担当 前川 ^{ゆたか}裕

前期から引き続いて『徒然草』を読み続けています。2008年4月から初めて、この2月頭で99段まで読み進むことができました。全243段ですから、4割以上を読んだことになりました。現在はお一方とともに読んでいますが、研究的な注解書や古語大辞典、またさまざまな校訂本の助けを借りながら、兼好の思想と、当時の社会、また現代に生きている教訓を学んでいます。全ての章段を読んでいくことで、深い内容の段があったり浅い段があったりと、私たちが持っていた『徒然草』のイメージが少しずつ変えられていくことを感じています。

『徒然草』を最後まで読み上げることが目標です。随筆という性質上、途中参加ももちろん問題ありません。一緒に古文をじっくりと読んでみませんか。もちろん古文初心者から、文法が怪しい、という人も歓迎です。岩波文庫とともに、鎌倉時代へと旅立ちましょう。

(文責 前川 裕)

『ラテン語入門』

担当 山下 ^{だいご}大吾

前学期に引き続き、ラテン語入門コースでは、一学期三ヶ月間でラテン語の基本的な文法事項を習得するプログラムを組んでいます。具体的には、教材として岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を用い、各課にあげられた文法事項を確認してから、羅文和訳問題を解いて頂く流れになっております。時間の関係で和文羅訳問題は授業内では行っておりませんが、担当講師が作成した試訳を後日お渡しして、授業後にその他の事項とまとめて質問をお受けしています。今学期はお二人が受講されております。

教科書は全体で51課の構成になっていますので、一学期全12回の授業数で割ると大体一回の授業数が4課から5課という計算になります。ラテン語のように格変化や活用形の多い言葉では一回の課目で覚えるべき項目も必然的に多くなりますので、受講生の方々も当初は大変だったように見受けられます。それでも毎回予習の範囲をしっかりと学習されており、和訳問題の回答を伺う限り大きなミスは感じられません。それぞれの変化表を声に出して読み、細かな違いを確認していく作業などは、時間の不足から授業では大幅に省略せざるを得ないのが実情ですが、普段の生活の中でしっかり復唱され、確認されている結果だと思われれます。現時点で当初のプログラム通り進んでいることから、このペースで進めば、最後の授業では普段の和訳問題だけでなく少し長めのテキストも読める余裕が生まれるのではと密かに期待しているところです。

教科書にはキケローやオウィディウスなど古典期のラテン作家のみならず、教父、近代の哲学者によるオリジナルのラテン語テキスト、さらにはラテン語に翻訳された聖書の章句やプラトンの言葉が収められており、古典古代から近現代にまで及ぶラテン語世界の幅広さを実感できる構成になっています。受講生の方々はその広大なラテン語世界へ踏み込まれていく際の僅かな一助になればと思いつつ、毎週確実に歩みを進めております。

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読』A

担当 山下大吾

今学期から始まりましたラテン語初級講読 A では、キケローの対話編『老年について』を冒頭から読み進めております。この作品は『友情について』とならんでキケローのいわゆる哲学的著作の中でも小品に属するものですが、それだけに通読に適しており、また内容も充実していることから、初級文法を終えた段階で取り組むテキストとして古来推奨されるものの一つになっています。今学期の受講生はお一人で、一月終了時点で全体の一割強を読み終えました。

対話編の主人公は大カトー。彼になぜ易々と老年の重荷を耐えられるのかと問う二人の若者に対し、先人の残した優れた例を挙げながら一つ一つその答えを明らかにしていきます。老年に関してしばしば語られる不平不満に対する答えは、「全てその種の不平の原因は性格にあるのであって、年齢にあるのではない」——老年に限った答えとも思われません。このような言葉が、大カトーの口を通してキケローならではの名文で表現されていきます。キケローのみならず古代ローマ世界、ラテン文学全体に浸透する *humanitas*——この言葉もこの対話編の冒頭で目にすることができます——の模範に触れ、味わえる喜びがここに 있습니다。

今学期は講師一人受講生お一人という非常に恵まれた環境を最大限活用して、また受講生ご本人の希望もあり、今のところ和訳など各国語訳には頼らず、もっぱらラテン語のテキストと辞書、文法書のみを用いて訳読を進める形をとっています。もちろんこの進め方は数ある方法の一つに過ぎません。ラテン語本文を正確に読み解いていくのが肝要であることは言を俟ちませんが、複数の翻訳を参照しながら意味を確認していく読み方から、各種の校訂本で異読にも目を配り、注釈書をひもといて各研究者の見解を押えつつ自らの読みを定めていく「本格的」な読み方まで様々な方法があるかと思ひます。受講生それぞれのご希望に合わせて読み進めるよう柔軟に対応いたします。

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読』B

担当 前川 ^{ゆたか}裕

今期のラテン語初級講読 A は、前期に引き続いてセネカ「ルキリウスへの手紙」を読んでいます。第 15 書簡から読み始め、一回に 15 行程度を読み進めています。学生から社会人までの 3 名の受講者とともに、文法を確認しながら本文を読み解いていきます。なかなか味のある表現があったり、難解な部分があったり、山あり谷ありではありますが、受講者の読解力は確実にアップしており、頼もしい限りです。

初級講読 A では、翻訳の参照も可としています。まずはラテン語のテキストそのものに慣れること、ラテン語をたくさん読むことを重視しています。浴びるようにとまではいきませんが、やはり読んだ量というものも読解力の養成には大きな力となると思ひます。原文と翻訳を比べて、「なぜこんな訳になるのだろうか？」と考えることも、ラテン語の構造を理解するためには大いに役に立ちます。

あなたも、ラテン語のシャワーを浴びてみませんか。一学期ごとに、成長が実感できることでしょう。

(文責 前川 裕)

● 『わたしとラテン語』

私は、現役の大学生で、今年の春に四回生になります。ラテン語を始めたのは、二回生の秋で、もう一年と半年ほどが経ちました。私は一年半の間、そして今も、お山の学校だけでラテン語の勉強を続けています。

ラテン語を始めようとお山の学校で申し込みをした頃、山下先生は以下のような要旨のことをおっしゃっていました。

「古典語だから、自分のペースで勉強すればいい」

私は、この言葉を忠実に守ってか、本質的にのんびりしている性格のせいか、特に焦ることなく、今も、のろりのろりと亀の歩みを続けています。

ラテン語を始めて半年が経った頃、己のあまりの覚えの悪さに、その頃お世話になっていた大西先生に、

「ラテン語、読めるようになりますかね。」

と、聞いたことがありました。すると、先生は少し目を大きく開かれてから、何ともないというように「大丈夫でしょう。」とおっしゃって、それから、これは自分がラテン語を学んだ先生の言葉だけれども、と、断られてから、

「ラテン語はゴイだ」とおっしゃっていました。」

と、言われました。先生が“ゴイ”と、少し強調するようにはっきりと発音されたのが、深く印象に残っています。

大西先生はラテン語の講読の授業で、私がうまく訳せないときにいつも、丁寧に文法事項を説明してくださってから、それでもまだ首を捻っている私に、

「今わからなくても、また同じことが出てきた時に、思い出せたらいいんです。」

とおっしゃってくださいました。わかるまでやればいいし、わかる時がくるから大丈夫だと常々おっしゃってくださいしていました。

お山の学校の先生方のお話を聞いていると、ラテン語は、きっと一つ一つが宝箱に入っているのだ、と、思わずにはいられません。先生方は、その宝箱を丁寧に開けながら、中の宝物を非常に愛着を持ってじっくり説明してくださるのです。

“ゴイ”と大西先生がおっしゃったあの時、私は、ラテン語の単語をたくさん覚えなさいと言われたのだと思っていました。

その言葉から約一年、今教えてもらっている山下大吾先生と、授業で和訳の仕方についてお話ししている時、ふと、あの時先生はきっと、ラテン語の単語の持つ豊かな意味を捉えられるようになりなさい、とおっしゃったのだなと思いました。

「ラテン語は“ゴイ”だ」

いつか自分が「私の先生が、先生から言われた言葉だけれど・・・」と人に話す日を思い浮かべ、今日もお山の学校で先生とキケローの『老年について』を読み進めています。

最後になりましたが、いうまでもありませんが、私はラテン語が大好きです。

2009年2月
俣野 八重

『ラテン語中級講読』

担当 広川直幸

この授業では、引き続きウェルギリウスの『農耕詩』を読んでいます。第二歌の中程まで進みました。今までは訳読中心の授業をしてきましたが、受講者の希望に応じて、その方法をやめることにしました。これからは、訳読は理解のための補助とみなし、原典の理解を、とりわけその音の鑑賞を中心にして授業を進めていきます。

ここで質問です。古代ローマ人は日本語を知っていたでしょうか。答えは当然否です。では、ラテン語を理解するために日本語は必要でしょうか。これも必然的に否です。つまり、本来ラテン語と日本語は全く無関係なのです。しかし、大学などでは、あたかも日本語にできなければラテン語を理解できないかのような教育が行われています。そして、本来無関係であるラテン語と日本語を複雑につなげあう本質的ではない回路作りに四苦八苦しています。その結果、語学は喜びではなく苦しみになってしまうのです。これは不幸です。言語を習得するという事は新しい世界を手に入れるということです。本当は楽しいことのはずなのです。

諸悪の根源は文法訳読方式です。文法訳読方式とはテキストを読ませて訳させるという誰もが経験したことがある例の教授法のことを言います。この教授法はもともと異なる言語で書かれた異なる文化を自分の文化に取り入れるためのものです。言語習得に向いている方法ではありません。また、対象言語をきちんと習得している人でなくても、この方法ならごまかしながら教えることができます。それで、なかなか無くならないのです。

では、文法訳読方式が言語習得にとって完全な悪かということ、そうとも言えません。日本人が外国語を身につけるときにすでに身につけている日本語を利用して悪いということはありません。ただ、日本語に訳すことが目的であると勘違いしてはいけないということです。皆さん覚えがありませんか、訳は覚えているけれども原文が思い出せないという経験に。

このような試みが、ほとんど訳読と同義である講読の授業でどこまで成功するか分かりませんが、できる限りのことをしてみるつもりです。

(文責 広川直幸)

『ギリシア語入門』

担当 広川直幸

昨年四月に始まったこのギリシア語入門の授業ももうすぐ終わりです。水谷智洋『古典ギリシア語初歩』という、お世辞にもやさしいとは言えない教科書を、毎週一課ずつ学んできた入門の道程にも、ようやく終点が見えてきました。受講生のお二方はどのような感想を持っているのでしょうか。やたらに変化練習でしごかれた。講師が教科書をバンバン直すので面食らった等々、色々な感想を抱いているでしょうが、やはり、教科書を一冊やり遂げたという充実感が一番大きいのではないのでしょうか。

この道程を何度も歩いたことのある私には、反省点や改善点ばかりが思い浮かびます。いくつか挙げてみましょう。もっと徹底して発音指導をするべきだった。簡単な例文をたくさん読ませるべきだった。宿題にして提出させるなどして、もっと変化練習をさせるべきだった。簡単な文を作る練習をするべきだった。他にも色々ありますが、それらはできるだけ今後の授業に反映させるつもりです。

入門段階を過ぎてしまえば、古典ギリシア語はラテン語ほど難しくはありません。ラテン語は、その仕組み上、文法の知識では解決できない曖昧な点が残りがちな言語です。しかし、古典ギリシア語にはそのようなことはほとんどありません。教科書にはあまり書かれることのない方言差についての基本的知識を身につけてしまえば、辞書や文法書、翻訳や註釈を参照しながら、読みたい原典を読んでいくことができます。ホメーロスもプラトーンも新約聖書も直に読むことができます。そうすれば、翻訳を読むのとは全く違う世界が開けます。ただし、訳読ばかりしては翻訳を読むのとあまり違いがありません。訳読はなるべくやめましょう。その代わりに、たくさん音読をしましょう。これが私に今できるささやかな忠告です。

四月からはまた新しく授業が始まります。古典ギリシア語に興味のある方、始めるなら今がチャンスです。また、『イーリアス』講読の授業も始まります。すでにギリシア語に入門している方も是非どうぞ。

(文責 広川直幸)

● 『わたしとギリシア語』

自分の通っている大学の担当教授の専門がギリシア哲学で、実は、ギリシア語には大きな憧れをもっていました。

とりあえずラテン語文法を終え、講読の授業を受けていた頃、ギリシア語を始めたいなと思い、冬学期の半ばだったと思いますが、山下先生に

「ギリシア語がやりたいです。」

と、言いました。すると、

「じゃあ、やりましょうか。」

と、二つ返事でおっしゃって、お山の学校にギリシア語文法のクラスが新設され、春学期に新しく広川先生がいらっしゃいました。三回生をむかえた今年の春のことです。

ソクラテスやプラトン、アリストテレスは、一体どんな言葉を話して、議論したのだろうか、そんな風に思いながら、ギリシア語文法を始めました。

広川先生の御意向で、ギリシア語文法は一年かけて学ぶこととなりました。これを書いている今、文法書はあと4課を残すところとなっています。ラテン語文法のクラスは、4ヶ月の間の12回の授業で文法書を終えるプログラムになっていて、私はまるで雪山のてっぺんから、そりでザーっと滑り降りるかのようにラテン語文法を終えました。それは、語学が得意とは到底言えない私にとって、苦痛の少ない授業だったと思います。けれど、どうやら私は早く終えることに夢中で、あまりラテン語というものを捉えられていなかったようです。

というのも、一緒にギリシア語を勉強している受講者の方も、すでにラテン語を学ばれているので、必要な場合、広川先生はギリシア語をラテン語に訳されたり、二つの言語間の違いを示しながら、ギリシア語を説明してくださいます。(また時に、英語やイタリア語のような近代語を用いて説明して下さることもあります。)それで私は、ラテン語で知らなかったこと、理解できていなかったことを学ぶ機会が同時に与えられたのです。

先生はいつも、何も書きこまれていない文法書をパタンと机の上に開けたまま、文法書に不足している文法事項の説明を非常に表現豊かに分かりやすく、そして詳細に解説してくださいます。

ある時私は、練習問題で出てきたプラトンの『饗宴』の一部を訳しつつ、ふと、アルキビアデスが「僕はただこの人(ソクラテス)の前だけで恥じるのだ」と告白するくだりを思い出し、理路整然たる解説によって理解へと導いてくださる広川先生の姿を見て、師ソクラテスを慕った人々のことを想いました。

広川先生は、いつも親切にアドバイスして下さるので、私はギリシア語文法を広川先生から学べてよかったなど、常々思っています。

文法書を終われば、この春から講読の授業が始まります。広川先生による古典世界への御導きを楽しみにしつつ、見果てぬ遙か昔のギリシア世界に思いを馳せています。

2009年2月
俣野 八重

『和して同ぜず』

文／山下太郎

山びこ通信の最新号をお届けします。講師による恒例の「クラスだより」に加え、会員による授業の感想も一部掲載しています。号を追うごとにページの合計枚数は増え続け、今回は全部で30ページを超えました。ご一読いただき少しでもピンとくるものをお感じいただけるなら、望外の喜びです。

私自身全体を通読する中で、『論語』の「和して同ぜず」という言葉が脳裏をよぎりました。言うまでもなく、すべての先生が参加者の「好奇心」を応援しようと一生懸命努力しています。この点に「山の学校」の「和する」姿勢を見出す一方、それぞれの先生が自分なりの強いポリシーをもってクラスに臨む点に「同ぜず」の意気込みを感じます。

今、先生のポリシーと書きましたが、実際にはクラスのポリシーと言い換えた方が実情に近いと思います。たとえば、同じ先生が同じ学年の異なるクラスを担当した場合、しばしばクラスの取り組み内容がまるで異なるものに見えてきます。これは、先生が参加者一人一人の個性を見つめ、それを最大限に引き出すもっとも相応しいやり方を考えた結果、そのような違いが生まれるのだと解釈できます。言い換えれば、参加者一人一人の個性がクラスの内容を創る主役になっている、といえます。

私は「山の学校」の先生と授業内容のことで対話するとき、しばしば「生徒さんの意気込みにこちらがいっぱい勉強させられます」という言葉を聞かされますが、この言葉が「山の学校」の取り組みのすべてを象徴していると思います。山びこ通信の原稿に目を通すと、そのような先生一人一人のクラスへの真摯な姿勢と熱い思いが感じられ、何よりありがたく思われます。

さて、新年度からいよいよ小学生対象の「かいが」がスタートいたします（詳細は2ページ参照）。また一般対象では、ギリシア語に「講読クラス」が新たに加わります（ホメロスの『イーリアス』を読む予定とうかがっています）。この二つのクラスは、年齢の対象こそ違いますが、どちらも人間の生きる喜びに深い部分で関わるクラスとして、かねてより開設できる日を待ち望んでおりました。こうして皆様にご紹介できることを心より嬉しく思います。

子どもたちを取り巻くこれからの10年、20年後の社会を想像しますと、ますます「和して同ぜず」、すなわち、他者と協調しながらも「自分」を見失わない生き方が強く問われるように思います。そのための基礎教育を行う場として、「山の学校」は今後ともできることを一つ一つ実践して参りたいと思いますので、どうかこれからも宜しくご支援のほどお願い申し上げます。

山の学校代表
山下太郎